

ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證據及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○第四節 在朝鮮國罪犯取扱規則 十六年十月第三十三號布達

朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則別紙ノ通協議決定ス別紙

約定シタル朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

第一條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照シ取扱フヘシ

第二條 朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セル日本國人ヲ取押ヘタルトキハ其罪証ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事官ハ速ニ其要求ニ應シ之ヲ審查シ照律處斷スヘシ但シ朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲナスコト無ルヘシ

第三條 犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏

ノ勝手タルヘシ但シ成丈速カニ護送シ事故ナクシテ徒ニ罪犯ヲ其地ニ淹留スヘカラス

第四條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スル時ハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乗込或ハ別船ニ在テ之ヲ引來ル俱ニ其便宜ニ任ス如シ陸路ヨリ護送スルハ其日本船ハ逐テ引渡ス迄ノ間ハ地方官ニテ之ヲ監守シ毀失セシムルコト無ルヘシ且其船具漁具其外運搬シ難キ物品ハ目錄ニ作り罪犯ニ添テ之ヲ送付スヘシ

第五條 若シ薪水食糧ヲ得ルカ爲メ又ハ獲タル所ノ魚類ヲ賣買スル爲メ上陸シ陸上ニ於テ其犯罪同行中若干名ノミニ係ルトキハ其若干名ノミヲ此手續ニ依テ護送シ其他ハ之ヲ拘引スルヲ無ルヘシ又海上ナレハ其罪犯ヲ除クノ外殘員猶航海ニ堪ルトキハ朝鮮官吏ハ其罪犯ノミヲ護送シ其他ハ之ヲ放還スヘシ

第六條 此規則ハ實行ノ上更ニ増損スヘキモノ有レハ雙方協議改正スルヲ得ヘシ

右確實ナルヲ証シ兩國ノ各委任大臣茲ニ記名調印スルモノ也  
大日本國明治十六年七月廿五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使 竹添進一郎印  
全權大臣督辦交涉通商事務閱泳穆印

### ●第十六章 沒收

#### ○第一節 贓品下渡

十五年六月司法省  
丙第二十四號達

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉帳シテ他人ノ手ニ在  
リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證據ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トス  
ルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因  
リ裁判言渡アル迄其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クヲ得ヘシ此旨爲  
心得相達候事

#### ○第二節 沒收物件處分

十五年五月司法  
省丙第二十號達

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ  
言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從  
ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ  
其裁判所々在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間ヨリ起算スニ所有主

ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直チニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達  
候事

但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ  
要スヘキ者ト思料ズル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保  
存シ置クヘシ

#### ○第三節 沒收物件處分ノ儀ニ付太政官裁令

○明治十八年七月司法省丙第六號達

沒收物件處分ノ儀ニ付左ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御裁令相成  
候條自今處分方心得ノ爲メ此旨相達候事

沒收物件處分ノ儀ニ付伺  
刑事裁判上沒收ニ係ル物件ハ破壞廢毀(燒燬之分ヲ除ク)之後若クハ原形之儘  
總テ公賣ニ付シ其代金ハ雜收入トシテ國庫ニ納付ス可キノ成規ニ有  
之候處今般警視總監大迫貞清ヨリ別紙之通上申相成候因テ審按スル  
ニ犯罪ノ用ニ供シタル器具ニシテ異種ニ屬スルモノ、如キハ警察官  
ニ於テ豫テ其製造法及用方等ニ注意シ置クモハ犯罪捜査上便利ヲ得  
ルヲ勘カラス犯述ニ因テ使用ノ器具如何ヲ推知シ隨テ犯人ノ誰タル

ヲ發見スルノ場合亦之レナシトセサレハナリ且右異種ニ屬スル器具ノ如キハ其儘人民ニ私有セシムルハ其危險測ル可カラサルヲ以テ必ス先ツ破壊スルニ非サレハ公賣ス可カラサルモノトス已ニ之ヲ破壊センカ餘ス所ハ唯其原質物ノミ之ヲ公賣スルモ管ニ手數ヲ煩ハズノミニシテ巨額ノ收入ヲ得難キヤ明瞭ナリ就テハ自今檢察官ニ於テ犯罪ノ用ニ供シタル物件ノ異種ニ屬スル者其他警察官上注意ヲ要スルモノト認メタルハ之ヲ警視廳若クハ警察署ニ付シ保存セシメ候様致度右ハ雜收入ニモ關係候義ニ付一應相伺候條至急何分ノ御指令相成度候也

指令

朱書

伺之通

明治十八年七月六日

(別紙) 犯罪ノ用ニ供シタル器具之義ニ付上申

犯罪ノ用ニ供シタル器具ノ種類如何ヲ詳知スルハ犯跡鑑定等警察上最モ必要ノコトニ付爾後其異種ニ屬スルモノハ之ヲ蒐集シテ當廳ニ保存致度就テハ當地方各裁判所ニ於テ沒收物品ノ内右等ノモノ有之

節ハ其都度當廳へ差廻候様御達置相成度此段上申候也

明治十七年十二月十五日

警視總監 大迫 貞清

司法卿伯爵 山田顯義殿

○第四節 全取扱手續

十九年四月大藏省訓令第三號

●石川縣伺

明治十九年

三月十九日

裁判所ニ於テ犯罪等ニ依リ沒收

シタル物件ハ引

繼ギ便宜賣却ノ

儀御達有之ニ就

テハ該物件ノ内

取扱方疑義ノ廉

左ニ

一沒收諸印紙ノ

回移ヲ受ケタ

ル片該印紙ハ

本廳ノ受ニ組

込ムベキヤ

明治十八年十一月太政官第六十三號達犯罪又ハ犯則ニヨリ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ

第一項 裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其廳ニ取寄セ又ハ其所

在地ノ戸長ニ保管セシムヘシ

第二項 沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以内ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス總テ適當ノ地ヲ

選定スルモノトス

第三項 沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ

削除スヘシ

第四項 公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルベシ

第五項 沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ

一前項印紙ノ内  
煙草帶印紙ニ  
シテ兩端ヲ繼  
合セタルノミ  
ニシテ消印等  
ナキモノト雖  
一旦裝置ノ用  
ニ供シタルモ  
ノハ燒却スヘ  
キヤ

○大藏省指令  
十九年四月  
一日

同之趣兩項共不  
取締無之様燒却  
可取計事

價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三ヶ月以内ニ於テ更ニ公  
賣ニ付スベシ

第六項 沒收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付  
スルモ價值ナシト認ムルモノ或ハ運搬費置場敷料ヲ要シ公賣スル  
モ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限内ニ於テ公賣ニ付スルモ  
買受人ナク若クハ代價不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜  
處分スヘシ

第七項 沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指  
揮ニ據リ之ヲ處分スベシ

○第五節

沒收物件地方

明治十九年一月

司法省丁第一號達

明治十八年太政官第六拾三號達ヲ以テ沒收物件ハ都テ地方廳ニ引繼  
グヘキ旨被相定候ニ付テハ自今該物件ハ書記局ニ於テ會計主任ヘ引  
渡スヲ要セス直ニ地方廳ニ引繼グヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事  
但地方廳ニ引繼ヲ爲スマア會計主任ヘ一時其物件ノ假預ケ等ヲ爲  
スハ格別ナリトス

○第六節

盜賣ニ係ル土地追徴

十三年四月

司法省達

盜賣ニ係ル土地追徴ノ儀ニ付甲號ノ通高知裁判所ヨリ伺出候間乙號

ノ通及内訓候條之レニ牴觸スル從前ノ指令ハ取消候條此旨爲心得相  
達候事

甲號

●高知裁判所伺 明治十三年二月十三日

刑事指令錄第五百七十九號明治十年八月三十一日仙臺裁判所伺ニ于  
玆甲乙丙アリ甲所有ノ地券証ト實印トヲ乙預リ置ク處甲ノ承諾ヲ得  
テ其地券証ヲ抵當トシ丙ヨリ金圓ヲ借リ然ル後乙擅ニ該地券ノ賣切  
証ヲ詐僞シ甲ヲ賣主トシ預リタル印ヲ押捺シ丙ニ付與シ乙又地所賣  
買願書ヘ甲ノ實印ヲ押シ丙ト連署シ村吏ノ添書ヲ請得テ縣廳ニ申請  
シ丙ノ名前ニ書換ヲ受ク而シテ丙ヨリハ期限ヲ定メ買戻シヲ得可キ  
一証ヲ預置セリ既ニシテ期限過去レリ於是該地所全ク丙ノ所有ニ屬  
ス甲初テ之ヲ聞キ乙ヲ告訴ス依テ乙ノ罪ハ費用受寄財産律及ヒ詐僞  
私文書條ニ問擬シ二罪ノ重キニ從テ論シ律ニ照シ地券ハ甲ニ追給ス  
可シト雖丙ニ在テハ素ト乙ノ詐爲文書ニ係ルヲ知ラス其地所賣買  
ノ手續成規ニ準シ縣官ノ認可ヲ經テ名前書換ヲ受ケシ者ナレハ直ニ  
追徴スル較不穩ヲ覺ユ如此ハ乙ノ資力ヲ追シテ甲ニ給シ該地券ハ乙  
ニ所有セシメ可然手云々トアルニ明治十年十月三十日伺ノ通ト御指

令相見ヘタリ然ルニ當裁判所ニ於テモ右ニ類似ノ件之レアリ茲ニ甲者アリ僻邑ニ住ス故アリテ大坂ニ趣ントス路高知市街ヲ過キ姻家ナル乙者ノ家ニ一宿ス乙者ハ甲者ノ睡ヲ窺ヒ白紙ヲ以テ竊カニ甲者ノ印影ヲ盜押シ甲者覺ラス而シテ甲者登坂ノ後乙者ハ甲者ノ委任狀ヲ詐偽シ丙者ヲ瞞着ノ甲者所有ノ田地若干ヲ賣與センコトヲ約ス丙者之ヲ信シ内金ヲ渡シ遂ニ地券替換ヲ了シ地價金ヲ乙者ニ皆濟ス乙者其價金ノ半ヲ費用シ犯罪發覺ス右乙者ノ罪ヲ斷スルニ前顯仙臺裁判所ノ同ヲ適用ス可キト主張スル者アレモ下官ノ鄙考スル所ハ田地所有者ナル甲者ノ如キ乙者ノ奸計ノ爲其所有ノ田地ヲ不意ニ失フノ理アル可カラス故ニ乙者カ丙者及ヒ村吏ト縣廳トヲ欺罔シ賣ルコトヲ得サル田地ヲ盜賣シ其代價ヲ丙者ヨリ詐取セシモノナルニ因リ丙者モ不幸ナリト雖モ乙者ノ偽言ヲ信シ買取セシ田地ハ眞ノ買取ニ非スシテ所有權ノ移リシモノト爲スコトヲ得サル者ナルヲ以テ該田地ハ甲者ニ還給シ地券証ノ名前ニ甲者ノ名前ニ復セシム可ク而シテ乙者資力アラハ丙者ノ損害ヲ贖償セシム右ノ如ク處分スルヲ以テ戸婚律重典賣田宅條盜賣田宅條ノ法理ニモ適ス可ク又新刑法御頒布ニナリテモ審査刑法第三百九十三條他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵

當典物ト爲シタル者ハ詐僞取財ヲ以テ論ストアルニ依レハ此犯罪ノ性質タル他人ノ田地ヲ冒認スル點ニアラスシテ詐テ其價金ヲ得ルニアリ果シテ然レハ其被害者ナル者ハ冒認ニ係ル田地ナルコトヲ知ラズシテ金ヲ出ス者ナリトス此被害者ハ乃チ前ニ掲ル丙者ト同一ニ田地ヲ所有スルコト能ハサルハ當然ナリトス聞ク處ニ據レハ佛國ニ於テモ盜賣ニ係ル不動産ハ他ニ所有ノ移ルコトナクシテ盜取ラレシ本主ノ有ニ歸スト公証人公正ノ帳簿アル國ニシテ猶ホ且ツ然リ況ンヤ本邦ノ如キハ地方官ノ地券書換ヲ聞届ルハ明治五年二月二十四日大藏省第二十五號布達ニ基キ賣買及ヒ地券下渡シ願ヲ允可スルニ止ル者ニシテ彼ノ公証ト同日ニ論ス可キ者ニ非ス故ニ明治十年八月三十一日仙臺裁判所ノ同ハ不當ナルヲ覺フ右鄙見ハ相當ト存候得共若シ不當ノ儀モ候ハ、仰御内訓候也

乙號  
内訓 明治十三年四月六日

盜賣ニ係ル土地追徴ノ儀ニ付伺ノ趣ハ見込ノ通タル可シ

○第七節 檢證及物件差押

明治十四年十二月司  
法省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

○明治十七年五月司法省丙第壹號(大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)憲兵本部)達

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相達候事  
甲號

裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ要書差押タル節還附方ノ儀ニ付上申

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶賣買讓渡質入書入奥書割印簿等ヲ差押ヘ數日間還附セサルコトアリ然ルニ戸長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ義務消盡ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿ヘ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿册下戻方裁判所ヘ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落着迄還付シ難キ旨回答有之取扱上願フル差支候趣ヲ

以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿册ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不尠就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ謄寫シ本書加除スルヲ得サル様掛紙契印等ヲ爲シ而シテ簿册ハ直ニ還付スヘク様致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年二月二十九日

福井縣令 石 黒 務

内務卿山縣有朋殿  
司法卿山田顯義殿

乙號

書面上申之趣聞届候尤モ裁判所ニ於テ謄寫セシ該書ヘハ戸長之レニ調印スヘシ若シ其謄寫ニ拘ハル内ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト心得事  
明治十七年五月二十八日

○第八節 贓物ニ關スル諸件

十四年三月司法省丙第六號達

大審院諸裁判所各檢事警視廳檢事ヲラサル各縣

贓物等官ニ於テ送致中途又ハ領置中遺失及ヒ盜難ニ罹リタルハ賠償處分ノ儀ニ付甲號ノ通岩手縣ヨリ伺出太政官ヘ伺ノ上乙號ノ通及指令候條之レニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消候爲心得此旨相達候事  
甲號

領置中ノ金品盜難等ニ罹リタル處分方ノ儀ニ付伺  
一 竊盜等ノ贓金品及罪囚ノ所持金ヲ官廳ニテ領置中盜難ニ罹リ其盜犯捕ニ就クモ資力ナキ時ハ固ヨリ事主ノ損失ニ歸ス可キ筋無之ニ付官之ヲ辨償ス可キ哉

一 前條盜難ニ罹リタルノ形跡明瞭ニシテ盜犯未タ捕ニ就カス又ハ該金品ヲ送致途中遺失シタルニ其證據顯然シテ未タ得者ノ無之如キハ其監守者ハ相當ノ處分ニ及ヒ事主ヘハ官ヨリ之ヲ辨償ス可キ哉  
右處分方ニ疑議ヲ生シ候ニ付至急御指令有之度此段相伺候也  
明治十三年十月十九日 岩手縣令 島 惟 精

乙號 指令  
兩條共伺ノ通

明治十四年三月三日

○明治十四年四月司法省丙第七號達

大審院諸裁判所檢事警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

事主ノ有無ニ因テ贓物ヲ區處スル儀ニ付舊兵庫縣大書記官原安太郎ヨリ甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通太政官ヘ相伺候處丙號ノ通御裁令相成候條爲心得此旨相達候事

甲號

贓金ヲ以テ購求セシ物品處分ノ儀伺

爰ニ盜犯甲某捕拿所持物品出所ヲ問尋スルニ事主乙某方ニ於テ盜シ贓金ヲ以テ購求セシ品ナリト明供シ該犯拘置中逃走百方搜索スルモ踪跡ヲ不得然ルハ贓金ニテ購求セシ物品事主乙某ヘ賠償ノ爲メ警察官ニ於テ下渡可然乎若シ本件事主分明ナラサルトキハ官沒ス可キ哉右差掛タル儀有之ニ付伺出候條至急何分ノ御指揮有之度候也

兵庫縣令森岡昌純代理

明治十三年十一月二日

兵庫縣大書記官 原 安太郎

司法卿田中不二齋殿

乙號

贓金ヲ以テ購求セシ物品處分ノ儀ニ付伺

兵庫縣大書記官原安太郎ヨリ別紙ノ通盜犯其窃取シタル金ヲ以テ購求セシ物品ハ事主アレハ警察官限リ下渡置キ事主不分明ナルハ官沒スヘキヤノ儀伺出候右ハ盜金ヲ以テ購求セシ物品ハ即チ正賊現在ト同視ス可キ者ニ付事主アレハ事主ニ還給セサルヲ得ス若シ盜犯逃亡スレハ其贓品ノニ裁判所ヘ送付スルニ及ハサルニ付警察官限リ假ニ下渡置キ追テ盜犯捕ニ就ク際其物品代價ヲ詳記シ盜犯始末書ト共ニ該裁判所ヘ送付シ若シ事主不分明ナルハ一年間其物品ヲ領置シ仍ホ事主知レサレハ官沒シテ可然哉右ハ法律上成文無之ニ付此段相伺候條早々御指揮有之度候也

明治十四年一月十四日

司法卿 田中不二磨

太政大臣三條實美殿

丙號

伺ノ趣ハ三年ヲ經テ仍ホ事主知レサレハ官沒スヘシ

但罪證ニ必要ナラサル物件及ヒ久シキニ難堪モノハ時限ニ拘ハラズ公賣シ其代金ヲ領置スルヲ得

明治十四年四月十八日

第十七章 費用

費用

十四年十二月司法省

六年十 明治四年九  
九號布 月晦日達  
告ニ依 諸官省印鑑  
テ消ル 遺失ノ者贖  
罪金刑部省  
ハ差出ノ處  
自今司法省  
ニ於テ處置

八年司 明治六年六

可致ニ付遺  
失屆書ノ儀  
其管轄ヲ經  
テ同省ヘ相  
廻ハサン

法省達 月九日司法

四十號 省達九十號

達ニ依 本年第廿五

テ消ル 號布達諸科

式ノ内書損

ヲ改正ス

明治七年四

日二日司法

廢止ニ 省達七號

依テ消 地方裁判所

及ヒ各縣ヘ

指令セシ諸

官員等推退

伺處斷ニ係

ル贖罪金自

今總テ外贖

贖金ト同一

ニ取總メ上

納セシム

○第一節 裁判言渡贖本費用

十四年十二月司法省

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ贖本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

○第二節 無資力

十四年十二月司法省

本年本 甲第七號布達裁判言渡ノ贖本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者ニ限リ無代價ニテ下渡スモ不苦儀ト可心得此旨相達候事

○第三節

控訴書類返

明治十五年三月司

控訴書類返附遞送費ノ儀ニ付別紙大審院上申ニ對シ朱書ノ通指令及ヒ置候條此旨相心得可取計事

上等裁判所ヨリ上告届出候趣ヲ以テ控訴書類遞送後其儘期限ヲ經過シ上告及ハス當院ニ於テ右書類返戻及候節遞送入費ノ儀ハ是迄官費ニ相立來候處右ハ人民ヨリ取立可然ト相考候得共當院ニ於テ直ニ各地在住ノ人民ヨリ取立候テハ實際繁雜ノ手數ニ相涉リ候間以來上等

第六編○治罪○第一類○治罪法○費用○裁判言渡贖本費用

三百九十五



裁判所ニ於テ遞送入費取立ノ節當院ヨリ返戻ノ入費ヲモ併セテ取立  
置キ候得ハ可然ト相考候條右ノ趣各上等裁判所へ御達相成度此段上  
申候也

明治十二年七月十一日

大審院判事

王乃世履

司法卿大木喬任殿

(指令) 上申ノ趣聞届候事

明治十二年八月五日

○第四節

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人へ書類ヲ送達スヘキ際是迄戸長ニ於テ使丁  
類送達使丁賃錢繰替渡ノ義 省丁第五號達

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人へ書類ヲ送達スヘキ際是迄戸長ニ於テ使丁  
賃錢繰替渡シヲ爲シ候儀モ有之候處自今繰替ヲ要スル節ハ一時裁判  
所ニ於テ繰替置退テ本人ヨリ償却セシムヘキ義ト心得ヘシ此旨相達  
候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ取消候事

○第五節

刑事ニ付警察官ノ  
處分ニ屬スル費用 十七年三月内務  
省乙第十八號達

刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用之儀ニ付指令又ハ訓示及ヒ置キ  
候次第モ有之候處豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ヲ  
除ク外ハ起訴ノ前後ニ拘ハラヌ裁判費用ニ相立タサル儀ニ付之ニ予  
盾スル指令及訓示ハ都テ取消候條支給方ハ明治九年第六十三號公布  
ニ據ル儀ト可心得此旨相達候事

○第六節

刑事上裁判所ヨリ戸長  
呼出旅費支出方心得 十三年三月  
司法省達

刑事上裁判所ヨリ戸長呼出旅費等支出方之儀ニ付内務省へ左ノ通御  
指令相成候旨太政官書記官ヨリ通牒有之候條爲心得此旨相達候事  
内務省ヨリ太政官へ上申 明治十三年一月十三日

刑事上裁判所ヨリ戸長呼出旅費及糶賣金其他書類等遞送費支出方ノ  
儀從來民費ヲ以テ支辨候向モ有之地方稅改正後旅行ニ至リ未タ一定  
ノ規則無之然ルニ各府縣ヨリ續々伺出候ニ付審按致候處右條件ハ固  
ヨリ戸長職務概目中ノ事項ニ非サルヲ以テ地方稅ヨリ支辨スヘキ筋  
無之專ラ刑事裁判ノ入費ニ係レハ自今戸長ノ旅費ヲ始メ諸遞送費等  
ニ一切裁判入費ヨリ支辨致シ可然ト存候就テハ該規則御制定無之テ  
ハ目下差支可申ニ付右之趣司法省へ御達相成候様致度此段相伺候至

急仰御裁定候

太政官指令

伺之趣ハ戸長職務取扱諸費中ニ包含スルヲ以テ裁判費ヨリ支辨ス  
ヘカラサル儀ト可相心得事

○第七節

裁判言渡贖本又ハ其拔書下付スル  
費用違警罪ニ限り徴收セザル件  
十五年三月  
司法省丙第  
十二號

明治十四年<sup>月十二</sup>當省甲第七號布達裁判言渡ノ贖本又ハ其拔書ヲ下付  
スル費用ハ當分違警罪ニ限り徴收セサル様取計ヘシ此旨相達候事

○第八節 旅費日當立替

十五年六月司法省  
丙第二十五號達

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出庭セシメタル証人鑑定人等ノ旅費日  
當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候儀モ有之候處該旅費日當等ハ則  
チ裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ儀ニ付  
自今右立換渡ヲ爲スニ不及儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令及ヒ内訓本文ニ抵觸スル件々ハ都テ取消候事

○第九節 送達賃錢繰替

十六年二月內務  
省乙第四號達

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ハ書類送達ノ節戸長役場費ヲ以テ丁送達賃

繰替相渡候儀自今不相成候條此旨相達候事

但從前ノ指令本文ニ抵觸ノ廉ハ取消ス

○第十節

裁判言渡本籍ヘノ  
通知及前科ノ取調  
十四年十二月司法  
省丁第三十三號達

刑事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍ヘ通知シ及ヒ犯人前科取調ノ儀是迄區々  
相成居候處來明治十五年一月ヨリ左ノ通可相心得此旨相達候事  
刑事裁判言渡アリタルハ治罪法第四百六十四條ニ掲グル既決犯罪  
表寫ヲ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ右送致ヲ受タル  
檢事ハ其旨ヲ犯人本籍ノ地ノ戸長ニ通知シ該表ハイロハ標號ニ從ヒ  
區別編纂致置可シ  
犯罪人ノ前科取調ヲ要スルハ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ照  
會シ檢事ハ編纂致置タル既決犯罪表寫ヲ送致ス可シ

既決犯罪表

イ號

何裁判所

第六編○治罪○第一類○治罪法裁判言渡本籍ヘノ通知及前科ノ取調三百九十九

イ號目錄

伊藤某	一丁
生駒某	二丁
飯塚某	三丁

何裁判所既決犯罪

氏名	(伊藤某)
年	(何年何月)
職	(何々)
住	(何縣何郡何町)

出生ノ地	(同上)
本籍	(同上)
罪名	(竊盜)
刑名	(重禁錮何年(或ハ何月)
犯數	(初犯或ハ再犯)
裁判言渡ヲ爲シタル年月日	(何年何月何日)
對審關席區別	(對審裁判或ハ關席裁判)

イ號

此表治罪法第四百六十四條ニ依リ裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時其言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル者トス但一葉一人ヲ記載シ(イロハ)ノ順序ヲ以テ氏名ヲ區別ノ之ヲ編綴シ探討ニ便ス可シ表中ノ朱書ハ記載ノ一例ヲ示スモラナレハ(ロ)以下之ニ準ス可シ

○第十一節

監倉獄舎ノ被告人 十六年七月司法  
 へ書類送達手續 省丙第四號達

監倉若クハ獄舎ニ在ル被告人へ送達スヘキ渾テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署へ送達ノ手續ヲ囑托シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ

明治十  
 六年七  
 月十四  
 日司法  
 監倉若クハ  
 獄舎ニ在ル  
 被告人へ送  
 達スヘキ渾  
 テノ書類ハ

第六編○治罪○第一類○治罪法○裁判言渡本籍へノ通知及前科ノ取調 四百一

裁判所ヨリ  
監獄署ヘ帰  
ルハ本人ハ  
送達シ令狀  
ハ正本其他  
ハ送達書ノ  
本ヲ裁判所  
ヘ返還スヘ  
シ但從前ノ  
指令内訓本  
又ニ抵觸ノ  
條件ハ取消  
トス

令狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ裁判所ヘ返還スヘキ様取計フヘ  
シ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ渾テ取消候事

○第十二節

證人等旅費  
日當渡方

十八年一月司法省  
丁第二號達

(十八年二月司法省丁第七號達ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

免訴無罪者ニ係ル証人醫師鑑定人通辯人翻譯人等旅費日當其他ノ費  
用官ノ擔當ニ歸スルモノハ裁判確定ノ即日其請求書ヲ以書記局ヨリ  
會計課ヘ報告シ渡シ方取計フ可シ此旨相達候事

但從前本文ノ通報書ヲナサス會計年度經過セシモノハ其遷延シタ  
ル事由書ヲ添付シ速ニ報告致ス可シ

▲參看 十八年一月司法省丁第二號達

免訴無罪者ニ係ル証人醫師鑑定人通辯人翻譯人等旅費日當其他ノ費  
用官ノ擔當ニ歸スルモノハ豫審終結及公判言渡ノ即日其請求書ヲ以  
書記局ヨリ會計課ヘ報告シ渡シ方取計フ可シ此旨相達候事

但從前本文ノ通報書ヲナサス會計年度經過セシモノハ其遷延シタ  
ル事由書ヲ添付シ速ニ報告致ス可シ

●青森縣伺

明治十六年  
六月廿八日

刑法第二百七十  
九條ニ司獄官吏  
程式規則ヲ遵守  
セシテ囚人ヲ  
監禁シ若クハ囚  
人ヲ出獄セシム  
ヘキノ時ニ至リ  
之ヲ放免セサル  
者ハ云々トアル  
ハ即チ故意擅行  
ニ出ツルモノニ  
限ルハ勿論ナリ  
ト雖モ若シ故意  
擅行ニ非スシテ  
放免スヘキ時日  
ヲ誤算スル者ハ  
本屬長官ニ於テ  
懲戒例ニ據リ處

第二類 [監獄則]

●第一章 監獄

○第一節 監獄則

十四年九月第  
八十一號達

明治五年達監獄則及ヒ本年(三月)第十三號達在監人給與規則同(七  
月)第六十四號達在監人雇工錢規則ヲ合セテ別冊ノ通監獄則相定候  
條此旨相達候事

但シ明治十五年一月一日以後施行ノ刑法治罪法ニ關涉スル條件ハ  
同日ヨリ施行スヘシ

監獄則目錄

- 第一編
- 第一章 汎則
- 第二章 監署ノ規程
- 第三章 監獄ノ構造
- 第二編
- 第一章 役法 附時限

分スルニ止マリ  
刑法ニ於テ論ス  
ルノ限リニアラ  
サル儀ト心得可  
公哉此段相伺候  
也

○司法省指令  
十六年七月  
十三日

●三重縣伺

明治十八年  
二月廿五日

監獄則第十四條  
ニ總テ入監人ノ  
携有スル財貨物  
件ハ悉ク點檢シ  
テ之ヲ(中略)但  
點檢ノ際隱匿セ  
シ貨物ハ沒收ス  
ト有之候處玆ニ

第二章 工錢

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章 給與

第二章 疾病 附死亡

第三章 書信

第四章 接見

第五章 差入品

第四編

第一章 教誨

第二章 賞譽

第三章 懲罰

監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スル者ニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ非ラズ

第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場

ハ警視總監又ハ府知事東京府縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキ者ニ適用スルコトヲ得ス

在監人ニシテ實  
印又ハ權利義務  
ニ關スル證書類  
ヲ隱匿スル者ア  
リ其實印ノ如キ  
ハ一己私有ノ物  
品ニ外ナラサル  
ヲ以テ同條ニ照  
シ沒收シ可然見  
込ニ候得共權利  
義務ニ係ル證書  
類ハ單ニ物品ト  
ハ難見做乎ニ相  
考候斯ノ如キモ  
ノハ監獄則第九  
拾五條第八項ニ  
準擬シ本人ヲ相  
當懲罰スルニ止  
メ該證書類ハ所  
持品中ニ領置シ  
放免ノ節還付シ

可然乎  
○内務省指令  
十八年三月  
二十一日  
書面伺ノ趣證書  
類ハ勿論實印モ  
沒收セサル儀ト  
可心得事

●樺戶集治監伺  
明治十六年  
十二月五日

第一條 已決囚  
徒入監ノ節所  
持之物品ヲ情  
願ニ任セ司獄  
官吏ヨリ他ニ  
賣却シタル後  
餘罪發覺シ右  
物品ハ曩ニ犯  
罪ノ用ニ供シ  
タルモノナル

第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ  
警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ  
裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ  
府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルヲ得  
第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記  
載シタル者ヲ云フ  
第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ情苦テ訴ヘントスル  
トキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口  
述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規程

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ  
犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス  
第九條 典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ查  
閱シ其他囚徒ノ傲惰ヲ生シ脱越等ノ事ナカラムルヲ要ス  
第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又  
ハ所刑宣告書等ノ文書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領收ノ証ヲ引致シ來  
タル者ニ交付ス其文書無ク引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

時ハ其公商公  
賣ニアラサル  
モノ之ヲ買取  
ルト雖モ沒收  
スルノ限ニ無  
之候哉

第二條 總テ證  
據物品裁判所  
ノ管轄地外ニ  
アルモハ其管  
轄裁判所ニ囑  
托シ送付ヲ求  
メ可然哉又其  
送付費用ハ何  
ノ裁判所ニテ  
支辨シ可然哉

第三條 前條送  
付シタル物品  
裁判濟ノ上還  
付ノ言渡ヲ爲  
シタル時其言

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷  
ニ引致ノ時モ同往セシムルヲ得ス  
已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請者アルモハ之ヲ許ス  
第十二條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ様本ニ照シ其要項ヲ詳  
錄シ一小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒  
クヘシ懲治人ノ監舎ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞  
アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ  
第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ  
簿冊ニ記載シ典獄一々證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但  
點檢ノ際匿セシ貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請  
フトキハ之ヲ許ス  
第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ  
記載スルモノヲ除キ終身又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミヲ許スヘシ

第十六條 已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ

渡ヲ受クル者  
裁判出所ノ管轄  
地外ニ在ル  
所ハ其所轉裁  
判所ヘ囑託シ  
還送致可然哉  
果ノ然ラ其運  
送費ハ何ノ裁  
判所ヨリ支辨ス  
可キ儀ニ候哉  
右相伺候條至急  
御裁令相成度候  
也

○司法省指令  
十七年一月  
十七日

第一條 見込ノ通  
第二條 治罪法  
第六十一條ニ  
從ヒ司法警察  
官檢察官又ハ

記載シタル者ヲ別異ス  
一 十六歳未滿ノ者ト滿十六歳以上ノ者  
二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再刑以上ノ者ト同上ノ年齢ニシテ初犯ノ者  
三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハヌ番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣外襟ニ白布ヲ纏着シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ其犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ  
矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者年齢ハ滿八歳以上滿二十歳以下ヲ限トス

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ  
一 刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘡啞者  
二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

裁判官ニ囑託  
スルコトヲ得但  
送付費用ハ囑  
託ヲ受ケタル  
官署ニ於テ支  
辨ス可キモノ  
トス

第三條 囑託ヲ  
爲ス迄ノ運送  
費ハ其官署ニ  
於テ支辨シ囑  
託ヲ爲シタル  
以後ノ運送費  
ハ囑託ヲ受ケ  
タル官署ニ於  
テ支辨ス可シ

●德島縣伺  
明治十六年  
十二月廿八  
日  
刑期々限内ニ死

第二十條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戸長ノ証票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六箇月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス  
入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舎ニ帶住セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス  
一 十六歳未滿ノ者ト十六歳以上ノ者  
二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其  
他必用ノ文書及ヒ領致ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ  
在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ  
在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別  
ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄サ  
シメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載

亡シタル囚徒ノ親族等ヨリ其遺骸ヲ請フニ依リ之ヲ下付致シ候上ハ式ヲ以テ葬儀執行候共不苦儀ニ候哉  
 ○司法省指令  
 十七年一月十九日  
 ●空知集治監伺  
 明治十六年八月三十日  
 曩キニ懲役終身ノ刑ニ處セラレ服役中逃走ノ末更ニ無期徒刑ニ處セラレ候モノ本刑ヲ懲役終身ト爲シ囚籍面ニ

シ褫奪シタルトキハ之ヲ刪除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ  
 第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ  
 第二十六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ掲示スヘシ  
 第二十七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察遞傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ  
 監署ニ領置セン金錢ハ出獄者ニ携帶センメス其金員ヲ録メ共ニ其地ノ警察官治罪法第六十條第二項ニ記載シタル官吏ニ送致スヘシ  
 第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得  
 第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘センム但傳告者誘工者ハ滿六個月以上其用務ヲ繼續センムルヲ得ス  
 傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

ハ無期徒刑ト記載セズシテ可然哉果ノ然ラハ監獄則第九九條ニ依リ處分セサルヤ差掛リ取扱上疑義ヲ生シ候ニ付此段相伺候也  
 ○内務省指令  
 十六年八月三十日  
 書面伺之趣監獄則第九九條ニ據リ處分シ囚籍面記載方ハ懲役終身及ヒ無期徒刑ヲ併記スヘキ儀ト可心得事  
 ●愛知縣伺  
 明治十六年五月四日

第三十條 刑期滿限ノ後頼ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得  
 第三十一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過ヘカラス  
 第三十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過クルヲ得ス其執行中ハ監守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ  
 其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ二分時ヲ過キサレハ埋葬若クハ下付スルヲ得ス  
 第三十三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スベシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラズ親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス  
 若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス  
 第三十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之



監獄則第十一條  
 一入監ノ婦女乳  
 兒(三歳未満ヲ  
 云フ)携帶セント  
 請フ者アルハ  
 之ヲ許ストアリ  
 其三歳以上ニ至  
 ル者ハ許サハル  
 御趣意ニ有之故  
 ニ有籍又ハ無籍  
 者ニテ妊娠ノ者  
 在監中分娩ス然  
 ルニ該兒三歳以  
 上ニ至ルモ無籍  
 ハ勿論有籍ノ者  
 ト雖モ引渡スヘ  
 ク親戚モ有之ハ  
 ハ有籍ノ者ハ原  
 籍戸長ヘ引渡シ  
 無籍者ハ監獄所  
 在ノ町村ヘ就籍

ヲ處分スルコトヲ得ス  
 領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ  
 第三十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏  
 其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ  
 水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ違ナキトキ  
 ハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得  
 第三章 監獄ノ構造  
 第三十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監  
 ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス  
 留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ  
 之ヲ區畫スヘシ  
 第三十七條 未決監已決監及懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ  
 甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交  
 遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙其製式ヲ同シク甲乙適  
 用スルヲ要ス  
 第三十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ  
 閤室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメザル

致サセ而ル後戸  
 長ヘ引渡シ恤救  
 規則第四項ニ照  
 準シ救助取計候  
 テ可然哉  
 一前條果ソ然ル  
 ハ其町村戸  
 長ニ於テ該兒  
 ヲ他ヘ附托シ  
 養育スルハ其救  
 育費額ニテハ  
 物價高貴ノ際  
 衣服等取賄フ  
 事能ク情勢不  
 得止者ハ其不  
 足費額ハ地方  
 稅救育費ヨリ  
 支辨シ可然哉  
 ○内務省指令  
 十六年七月  
 廿一日

ヲ要ス  
 密室閤室ハ一室一入ヲ限トス  
 第三十九條 接見室ハ監倉ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ  
 之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ  
 格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接  
 見室ハ此例ヲ用ヒス  
 第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障得スルノ虞ナカラシムヘシ  
 第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防グヘシ  
 第二章  
 第一章 役法 附時限  
 第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ每囚一  
 日ノ科料ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未満ノ者滿六十  
 歳以上ノ者及ビ病後ノ疲勞若クハ身体ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサ  
 ル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寬恕ス  
 若シ已ムヲ得ズ外役ニ服セシムルトキハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆  
 シ笠ヲ用テ晴雨ヲ 其面ヲ掩ハシム但外行ノ囚徒ハ一組十人以上十  
 五人以下ヲ定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

伺之趣該兒引取  
人ナキモノ及本  
籍不分明ナル者  
ハ監獄則第三十  
條ニ準シテ處分  
スヘキ事

●青森縣伺

明治十六年  
四月四日

無籍ノ犯罪人三  
歲以上ノ小兒ヲ  
携帶セルル其子  
養育方ノ儀客歲  
九月十三日電報  
ヲ以テ相伺候處  
同月廿二日恤救  
規則ニ據リ支辨  
スヘキ旨御指令  
ノ趣モ有之候處  
有籍ノ者ト雖田  
原籍遠地ニアル

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサシム  
ルヲ要ス

第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外  
ニ整列セシメ看守長及ヒ看守点檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦  
同シ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦  
一日免役ス  
一月一日

元始祭

一月二日

紀元節

孝明天皇祭

神武天皇祭

春季皇靈祭

神嘗祭

秋季皇靈祭

新嘗祭

天長節

十二月三十一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲ  
シテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニ習熟シ易キ工業ヲ授クル  
ヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖田典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ

片ハ無籍者ト伺  
シク其犯人ノ令  
狀ヲ受ケタル地  
ノ戸長ニ於テ其  
兒ノ養育方ヲ引  
受ケサルヲ得サ  
ル儀ト存候果シ  
テ然ラハ右費用  
ハ犯罪者ノ親族  
ニテ辨償シ親族  
貧困ニテ難償ハ  
ハ原籍町村協議  
ニテ支辨シ其町  
村ニテ償兼候節  
ハ其地方稅救育  
費ヨリ支辨スル  
儀ト心得可然哉

○内務省指令  
十六年七月  
廿一日  
同之趣其家元及

生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムル  
ヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキハ亦同シ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過  
ギサル時間休憩時  
間ヲ除農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ每朝日出ノ頃ニ起  
床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以内監房外ニ  
於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ每朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃  
除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午  
前一時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後  
暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但  
時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ  
全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ラハス罷役セシム

第六編○治罪○第一類○監獄○監獄則

四百十五

親族共貧困ニシテ辨償シ能ハサルハ本籍地方稅救育費ヲ以テ支辨スヘキ事

●滋賀縣伺

明治十六年

二月廿六日

生活ノ道ナキ無  
薪人取扱方ノ儀  
ニ付客年五月中  
庶甲第七二號ヲ  
以テ云々相伺候  
處書面伺之趣刑  
期滿限ニアラズ  
ノ在監候者ハ退  
監セシメ其自活  
ノ道無キ分並ニ  
今后右等ノ分ハ  
今般第五十號布  
告ヲ以テ十年第

午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ  
若シ儉懶ニシテ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科定シ之ヲ十分シテ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決監ニ在ル者並ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ日當ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢モ亦同シ (圈點ハ十四年九十號ヲ以テ更正ス)

第五十二條 第十九條第二款ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルコト能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得

第五十六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五十七條 在監人若シ逃走シタルハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬無レハ之ヲ沒收ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送  
第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒モノアルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒刑刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ每歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

九十五號達被廢  
候ニ付恤救規則  
ニ依リ救助可取  
計旨御指令有之  
然ルニ明治七年  
(二月)第百六十  
二號公達恤救規  
則ニ依リ救助可  
取計モノハ極貧  
ノ者獨身ニシテ  
廢疾或ハ重病又  
ハ十三年以下ノ  
モノニ限ル儀ニ  
有之其餘ハ規則  
毎項但書ニ相當  
スルニアラサレ  
ハ救助難致儀ニ  
候然ラハ生活ノ  
道ナキ無籍人ニ  
シテ該規則ニ相  
當セザル者有之

節ハ其處分方如何取計可申候乎  
監獄則第十一條  
ニ入監ノ婦女乳  
兒三歳未滿ノモ  
ノヲ携帶セント  
請フモノアルハ  
ハ之ヲ許ストア  
リ然ルニ其三歳  
以上ノモノヲ携  
帶候モノ有之節  
ハ直ニ親族ヘ下  
付シ生活ノ道ナ  
キニ於テハ恤救  
規則ニ依リ救助  
可取計ハ勿論ニ  
候得共若シ其者  
無籍ニシテ親族  
等無之時ハ其兒  
童ヲ引受サスヘ  
キモノ無之如此

第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚ト  
ヲ別ツヘシ遞船中ニ在テ戒具ヲ用ヒサルモ妨ナシ  
第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎  
第六十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ  
家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ  
屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス  
第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其  
他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取ル  
シ之ヲ許否スヘシ  
前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戸長  
ニ通告スヘシ  
其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄  
之ヲ許否スヘシ  
第三編  
第一章 給與  
第六十三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス  
第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トス臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥

場合ニ於テハ如何處分致可然候  
手  
前項兒童救助之  
儀恤救規則ニ依  
レハ獨身又ハ獨  
身ニアラサルモ  
家人七十年以上  
十五年以下ニテ  
窮迫ノモノニ限  
ル儀ニ有之然ル  
ニ前文兒童ノ儀  
ハ獨身ニ無之候  
得共其父母等入  
監中ハ獨身全様  
ノ姿ニ付其父母  
等入監中相當救  
助取計出監ノ上  
ハ直ニ給與ヲ廢  
止スヘキ儀ニ候  
手

具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルヲ能  
ハサル者ニハ之ヲ貸與ス  
第六十五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺黃色トス  
第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣  
就役衣ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス  
獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ  
第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具  
通常服  
一單衣  
一裕  
一綿入衣  
一襦袢  
就役服  
一單短衣  
一裕短衣  
一綿入短衣  
一襦袢



費ヲ混一ニ仕賄  
 延囚員ニ割合候  
 處國庫囚徒ノ在  
 監セサル支署外  
 役所等ノ費用モ  
 混一ニ仕賄候テ  
 ハ計算上ニ錯雜  
 不尠且未決監ノ  
 支署ニノ僅カ輕  
 禁錮拘留ノ刑ニ  
 處セラレシ者ア  
 ルカ爲ニ其費用  
 ヲ(獄署諸費ヲ  
 云フ)連帶ノ支  
 辨ニ混入スルハ  
 少シク妥當ナラ  
 サル様思考候ニ  
 付右支署外役所  
 等全ク國庫囚徒  
 ノ在監セサル處  
 ノ費用ハ地方費

月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス  
 第七十三條 已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常ニ之ヲ短雜シ鬚鬚アル者ハ  
 帶ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラス  
 婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サス  
 第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之  
 テヲ濯ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之  
 ヲ晒洗スヘカラス  
 第二章 疾病 附死亡  
 第七十五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病  
 室ニ於テ醫療セシム  
 懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得  
 第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ル  
 コトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ証明セシメ典獄之ヲ考檢シ  
 テ許否スヘシ  
 第七十七條 傳染病侵蔓ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニスヘシ  
 若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉  
 シ醫師ノ診察書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告スヘシ

ヲ以テ仕拂國庫  
 囚徒ノ在監スル  
 監署ノ費用ノミ  
 國庫地方稅ノ連  
 帶ニ取扱不苦候  
 哉  
 ○內務省指令  
 十六年九月  
 七日  
 書面伺之趣本支  
 署ヲ問ス已決囚  
 ニ係ル費用ハ總  
 テ混一可仕賄事  
 ○茨木縣伺  
 明治十六年  
 七月十七日  
 明治十四年乙第  
 三十四號ヲ以テ  
 已決囚ニ係ル經  
 費區分方御達ニ  
 付已決囚ニ係ル

○死亡  
 第七十八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并蒞テ之ヲ驗屍スヘ  
 シ未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタル  
 トキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ  
 第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時間ヨ  
 リ二十四時以內ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシ  
 テ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ  
 遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建  
 ツヘシ其標ハ約子面三寸長三尺五寸トス  
 第三章 書信  
 第八十條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一  
 通ニ過ルコトヲ得ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ  
 又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルコトナ  
 ク且必用ト認メタルトキハ此限ニ在ラス  
 第八十一條 未決者ニ係ル書信ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢  
 閲ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス  
 第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル書信ハ一個

諸費ハ總テ一ヶ月間混一支賄置而シテ(本文)署總囚延人員ニ分割シ國庫地方稅ノ兩費ニ精算致來候得其實際取扱上錯雜妙ナカラズ隨テ精算ニ延滞ヲ來シ不便候間輕罪囚ヲ使役スル一支署費ノ如キ區界判明ニ兩費(國庫金地方稅金)ニ連帶セサル者ノ如キハ一ヶ月間混一支賄ヲ不要其時々該囚員限リ精算相立可然哉  
○內務省指令

月一次トシニ通ニ過ルコトヲ得ス  
第八十三條 在監人ノ發スル書信ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス  
第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル書信ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス  
第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ嫌疑ノ文意アルヤ否ヲ詳查スヘシ  
第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム  
親屬故舊若クハ辨護人ノ信書ハ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘシ  
第四章 接見  
第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之ニ面接ヒテ其氏族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ己ムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキコトナキトキハ之ヲ許シ看守長看守并蒞テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

十六年八月十四日

書面伺之ハ趣從前之通可取訂事  
●大坂府伺  
明治十五年十一月廿四日

第一條 明治十四年內藏兩省乙第三十四號御達第一項中豫算ヲ以テ受入タル監獄費中國庫金ト地方稅金トハ混一シテ諸費仕賄置キ每一箇月ニ囚員ノ延數ニ照シ云々ト有之右ハ當

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス  
第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑監獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分ヲ過ルヲ得ス  
第五章 差入品  
第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又飲食物炊爨ヲ要セザルモノニシテ一人一食ノ量ニ限ルヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス  
第九十條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス  
第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服夜具等ノ寄贈ヲ受タルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ  
第四編  
第一章 教誨  
第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム  
第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモ

府公私賣淫規

則ヲ犯シ苦使  
ニ處シタルモ  
ノ及懲治者ノ  
如キモ囚員中  
ニ差加エ一囚  
ノ平均費額ヲ  
算出スヘキ儀  
ニ可有之哉將  
タ右等ノ者ハ  
差除キ其他ノ  
囚徒ノ延數ニ  
照シ國庫費ト  
地方費トヲ區  
分スヘキ儀ト  
相心得可然哉

第二條 監獄費

ノ儀ハ集治監  
ニ入ルヘキ囚  
徒ト府縣獄ニ  
入ルヘキ囚徒

ノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖畫等ノ科  
目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス  
學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル  
爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齢等  
ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閱ニ供シ又ハ其尊屬親ニ示スコアル  
ヘシ

第九十五條

各監房內ニ左ノ諸款ヲ掲示シ傍訓釋義シテ解シ易カラ  
シムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時內ニ  
於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

掲示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正  
フスヘシ 未決監ニハ  
此款ヲ除ク
- 一 毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁  
周圍等ヲ掃除スヘシ

トニヨリ國庫  
費ト地方費ト  
ヲ區分スヘキ

ニ付テハ其監  
獄ニ屬スル雜  
收入モ亦國庫  
金ト地方稅ト  
ニ割合ヒ收入  
スヘキ歟果  
然ハ雜收入ノ  
內看守押丁ノ  
罰俸及不用品  
賣却代等ハ每  
一箇月總囚員  
ニ照シ一囚ニ  
當ル金額ヲ得  
而シ其一囚ニ  
當ル金額ヲ乘  
率トシ之ヲ刑  
期終身ノ者及  
國事犯期五年

一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外カエ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ  
禁ス

一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ同往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或  
ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス

一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起步スルヲ禁  
ス但晝間ト雖田放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス

一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似  
ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ  
所爲アルヲ禁ス

一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工  
場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ  
此款ヲ除ク

一 許可ヲ得ステ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス

一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘ  
シ

一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞  
フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ  
一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所



以上ノ者ノ延人員ニ乗シタル金額ヲ國庫金ヘ其他ノ囚徒ノ延人員ニ乗シタル金額ヲ地方稅ヘ收入シ備工錢及遺留品賣却代其他沒收金ノ類ハ刑期終身ノ者及國事犯期五年以上ノ者ニ係ル現收額ヲ以テ國庫金ヘ其他ノ囚徒ニ係ル現收額ヲ以テ地方稅ヘ直ニ收入スヘキ儀ニ可  
有之哉將々雜

ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ  
一病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ  
一水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ  
右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

某監獄署

第二章 賞譽

第九十六條 已決囚獄則ヲ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞與スヘシ  
第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖<sup>肩背間</sup>ニ方二寸<sup>曲</sup>尺ノ淺黃色ノ布ヲ縫着スヘシ  
第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲ヌヲ得  
第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二箇月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ

收入ハ何等ノ種類ヲ分タズ總テ明治十四年内藏兩省乙第三十四號御達第一項ノ例ニ準據シ國庫金ト地方稅ト收入ノ區分ヲ爲スヘキ儀ト相心得可然哉  
○內務省指令  
十六年十一月二日  
第一條 後段伺ノ通  
第二條 今般當省乙第三十八號達ノ通可取計工錢其他ノ沒收金モ同様

通信スルヲ許ス

第百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金二十五錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス  
第百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ錄シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ  
第百二條 懲治人第百條ニ適シタル勞動アルトキハ金二拾五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章 懲罰

第百三條 已決囚獄則ヲ犯スルハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス  
一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス  
二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス  
三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス  
四 閤室 閤室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品

處分スヘシ

●埼玉縣伺

明治十六年

六月廿六日

監獄費兩費區分  
其他取扱上疑義  
ノ件左ニ相伺候

第一條 明治十

四年乙第三十

四號ヲ以テ御

達相成タル監

獄費國庫金ト

地方税金ト區

分計算方ノ儀

ハ一監獄内ニ

集治監ト府縣

獄トニ入ルヘ

キ囚徒混淆シ

テ費用區分判

然セサル者ヲ

指シタル者ニ

ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第四百四條

トス

減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第四百五條

懲治人及ヒ十六歳未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム

第四百六條

獨愼ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

第四百七條

未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第三百三

條

第三百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第四百八條

賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪ス

第四百九條

無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚

シテ假令ハ一

縣内ニ府縣獄

ニ入ルヘキ囚

徒ノミ使役ス

ル支署アリテ

自ラ費用區分

判然ナル者殊

ニ本署ニ集治

監ト府縣獄ト

ニ入ルヘキ囚

徒アル者ノ

經費ト混一配

算セス直ニ地

方税ノ支辨ニ

取扱ヒ可然哉

第二條 果シテ

前條ノ如クナ

ルモ玆ニ一支

署アリ常ニ府

縣獄ニ入ル可

キ囚徒ノミヲ

又ハ一脚ニ鉄ヲ施シ仍ホ鉄丸ヲ屬シタル鉄索ヲ其鉄ニ貫キ腰間ニ纏帶セシメ練帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鉄丸ノ量ハ二百目以上二貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ

施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ

鉄丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第一百十條 減食或ハ閤室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診

視セシメ身體ニ妨ナキトヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第一百十一條 屏禁減食閤室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ

看守長時々其動靜ヲ窺察シ情況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲシテ之ヲ

問ハシムルコトアルヘシ

第一百十二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ル、トキハ之ヲ免ス

コトヲ得

第一百十三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背

シタルトキハ七日以下之ヲ拘置スルコトヲ得

使役ナルに費  
用判然區分ナ  
ク看守俸給及  
ヒ被服并屬具  
廳中需用品囚  
徒ノ被服雜具  
ノ類本署ニ於  
テ一同購求シ  
囚員ノ増減ニ  
應シ交付又ハ  
返還シ及ヒ本  
署ヨリ移轉セ  
シムル囚徒ニ  
附着スル衣服  
物品等アリテ  
該支署ニ屬ス  
ル經費タルヲ  
區分スルニハ  
錯雜ニ判別  
ニ手數ヲ要ス  
ルノミナラス

〔典獄(檢印)〕懲治人名籍 主檢 書記(氏名印) 「横線以下朱書」		本管 區郡(町村)番地住何某(男弟、女妹)	出生地 何國郡(町村)産	氏名 何某	年籍 某年月日生 當何年何月何年何月	懲治人及 ヒ宗門ノ營業 主願者タル尊屬親ノ營業	親屬 父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無	入場ノ年 明治何年月日午(前後)第何時入場	入場ノ事 狀	身材 長何尺何寸何分肥瘠強弱	容貌 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、 癩子、癭瘤、黑痣、癩風、天瘰、創癩ノ類及音聲ノ高低ヲモ細 綴ニ具載	音聲 入場ノ時文字ヲ知ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 入場後進學ノ景况 何宗或ハ宗門不詳	教育及 ヒ宗門
---	--	--------------------------	-----------------	----------	--------------------------	-------------------------------	---------------------	--------------------------	-----------	-------------------	--	---	------------

細密區分難相  
立實際却テ不  
便ニ有之如斯  
ハ其支署ニ於  
テ支出スル囚  
徒食費ノ如キ  
モ本署ノ經費  
ト混一ノ計算  
取扱ヒ可然哉  
第三條 前條ニ  
反シ費用分界  
アル支署本署  
各集治監ト府  
縣獄トニ入ル  
可キ囚徒アル  
時ハ費用區分  
方一監獄毎ニ  
延囚員ヲ以テ  
計算ス可キ乎  
將々本署ニ混  
一シテ兩費(

入場中 ノ賞罰 書信 ノ月日 留置ノ宣 告ヲナセ シ裁判所 ニ送附ス ル時ハ 其事由 ヲ詳述ス	事變 犯由ノ大畧及ヒ某裁判所	放還 明治何年月日某家ニ放還	〔典獄(檢印)〕未決者名籍 主檢 書記(氏名印) 「横線以下朱書」	本管 某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女	出生地 何國郡(町村)産	氏名 何某	年籍 某年月日生 當何年何月何年何月	營業及 ヒ親屬 營業ヲ詳記ス可シ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無
---	-------------------	-------------------	---	----------------------------	-----------------	----------	--------------------------	--

<p>國庫金ト地方税金)ト區分可相立哉</p> <p>第四條 乙第三拾四號御達但書囚員限リヲ以テ計算スヘキ移轉費中假令ハ他ノ府縣ヨリ各地集治監ヘ押送スル囚人管内遞傳中諸費ハ其都度區分判明ナルヲ以テ其時々本拂トシ本支署ノ間ニ彼是移轉スル諸費實際區界難相立者ハ一箇月間混一仕賄</p>											
乳兒提携	入監ノ年月日時及ヒ事件	身材	容貌音聲	教育及ヒ宗門	入監中ノ賞罰	書信ノ贈答ヲ許ス月日	當該官ノ氏印	保釋	責付	事變	終結
男或ハ女 收監ノ時何歲何ケ月	明治何年月日午(前後)第何時入監 何罪ヲ犯ス	長何尺何寸何分肥瘠強弱	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、癩瘡、癩風、天皰創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細イボコナホクロナマツアキスアト 綴ニ具載ス	文字ヲ識ルヤ或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ	明治何年月日何國郡(町村)任親屬若クハ朋友ニ書信(發來)	裁判長ノ氏名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ氏名	明治何年月日保釋若クハ責付	明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監	明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行 又ハ他監押送	

<p>置キ該囚員限リノ平均ヲ以テ計算相立可然哉</p> <p>第五條 延人員ヲ算出スルニ茲ニ二法アリ一ハ飯料ノ如キモノヲ割賦法ニシテ夕ニ入監シ朝ニ出監等極メテ多シ依リテ一日ノ飯數即チ三飯ヲ以テ一人トシテ延人員ヲ積算ス二ハ獄署費其他ノモノヲ割賦法ニシテ夕ニ入監スルモ朝ニ</p>									
<p>(典獄(檢印)已決囚名籍 主檢 書記(氏名印) 「横線以下朱書」</p>									
本管	出生地	氏族名	年齢	營業及ヒ親屬	乳兒提携	刑名及ヒ宣告ノ月日裁判所ノ名稱	收監ノ年月日	犯由ノ大畧及ヒ犯數	身材
某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女	何國郡(町村)産	何	某年某月某日生	營業ヲ詳記スヘシ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無	男若クハ女 收監ノ時何歲何ケ月 父母ニ先チテ出監シ或ハ死去シタルトキハ之ヲ詳記ス	何刑若干年月日 明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告	明治何年月日午(前後)第何時入監	財物ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大畧ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ其裁判所ニ於テ何刑ニ處セラレ 長何尺何寸何分肥瘠強弱	

出監スルモ皆一人トス尤モ朝ニ未決囚夕ニ已決囚ニナルモノ及ヒ本支署移轉發着同日ナルモノ前例ニ依テハ重複スルヲ以テ出ノ方ヲ扣除シ入ノ方ヲ増加シ延人員ヲ算出ス如斯延人員ノ積算ニ三例ヲ設ケ國庫費ト地方費ト配算取計可然哉	第六條 囚徒飯米炊所已未決囚トモ一所ニ	容貌 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰子、癭瘤、黑痣、癩風、天駱、創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス	音聲 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳	教育及ヒ宗門ノ賞罰 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ	入監中ノ賞罰 明治何年月日何國郡町村任親屬若クハ朋友ニ書信(發來)	假出獄 明治何年月日何日假出獄或ハ免幽閉	免幽閉 明治何年月日病死或ハ變病或ハ脫監或ハ何罪ヲ犯シ復タ未決監ニ入ル	事變 明治何年月日滿期放免又ハ特赦	終結 明治何年月日
---	---------------------	--	---	----------------------------	--------------------------------------	-------------------------	--	----------------------	--------------

假出獄ノ證票  
某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女  
族籍  
何 某  
某 年 月 日 生  
明治何年何月何年何ヶ月

シテ米價ヲ除クノ外費用區別難相成然レハ獨リ米價ヲ判知スルモ他ノ費用區分ナシカタキ上ハ都テ一箇月間混併仕賄置キ兩囚延人員ヲ以テ計算區分シ可然哉	第七條 一構内ニ未決已決監アル獄舎ニシテ其區域判別シ難キ箇所(獄署及ヒ周圍兩監經界ノ牆壁又ハ物置小屋ノ類)ノ建	身 材 名籍ノ様本ニ倣ヒ詳記スヘシ 容 貌 上ニ全シ 罪質犯數 刑名刑期 及附加刑 何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受ケ何年月日ヨリ執行何年月日滿期 一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約テ何日迄ニ到着シテ即時其地ノ警察官ニ届出テ此證書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事 一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレサル事 一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事 一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滞留スルトキハ滞留地ノ
--	---	---

第六編〇治罪〇第一類〇監獄則〇監獄則

築修繕ハ渾テ未決囚員ヲ併シ國庫費地方費ノ區分取扱ヒ可然哉

第八條 監獄費  
兩費區分方每一箇月混一仕賄置モ其月ノ延囚員ニ割合算出ハ勿論ニ候處假令ハ甲月ニ購買シタル品物ノ内半額ハ乙月ニ至リ仕用シ或ハ甲月ニ費消シタル品價ヲ乙月ニ下附スル等月々有之右現品支消シタ

警察官ヨリ其証書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此証書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事  
右之通心得サセ假出獄ノ証票ヲ與フル者也

明治何年 月 日  
印 署

某監獄署  
長官何某  
印

○假出獄ヲ受タル者所有金アルハ此証票ノ裏面若クハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ  
一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事  
一警察官ヘ送り遣シタル金圓ハ其居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘキト雖モ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サ、ルヘキ事

料紙半紙

(括弧)朱書

ル月ノ延囚員ヲ以テ割賦スヘキモノトスレハ手數ヲ煩スノミナラス獄署ノ用紙薪炭油附木等ノ類ニ至リテハ實際差支行ハレ難キ次第ニ付キ右ハ囚徒ニ身上ニ係ル費途食糧被服費等ノ類ヲ除クノ外都テ代價仕拂タル月ノ勘定ヘ編入即チ其月ノ延囚員ニ割合可然哉

第九條 監獄則

何(管下某)監獄署 在監人書信紙 ○ 明治何年 月 日

一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ  
一書信ノ支句規則ニ背キタルヲアルトキハ其送致ヲ止メ  
仍ホ相當ノ罰ニ處ナルヲアルヘシ

囚徒服役時限表

第六編 ○ 治罪 ○ 第二類 ○ 監獄 ○ 監獄則

二在監人一人 一日菜代金一 錢五厘以下日 用雜費金一錢 二厘以下トア ルニ依リ精々 節減ヲ加ヘ定 額ニ超越セザル 様注意仕賄フ 毛殊ニ雜費ハ 外役囚多數ナ ルヨリ雨天ニ ハ鞋ノヨニテ モ一八九三足 ヲ要スルコト有 之諸費仕賄難 ク甲月ノ超過 ハ乙月ノ殘餘 ヲ以テ補充來 候ヘ用若シ年 度決算ノ際定								
月日時限	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
起床	午前七時 〇二分	六時三十分 八分	六時〇六分	五時三十分 二分	五時〇一分	四時四十分 九分	四時五十分	五時十六分
就役	午前八時 〇二分	七時三十分 八分	七時〇六分	六時三十分 二分	六時〇一分	五時四十分 五分	五時五十分	六時十六分
小憩	午前第十 分ヨリ第十 分	第十時 十五分ヨリ 十五分	同上	第九時四 十分ヨリ第十 分	第九時三 十分ヨリ第十 分	同上	同上	同上
午飯	正午十二 時ヨリ十二 時五分	十二時 ヨリ十二時 五分	同上	同上	十二時 ヨリ十二時 三十分	十二時 ヨリ十二時 五分	同上	同上
罷役	午後三時 三十分	三時五十分 分	四時	四時三十分 分	五時	五時二十 分	五時十分	四時五十分
晚飯	一時二十 八分	一時三十分 二分	一時五十分 四分	一時五十分 八分	一時五十分 八分	一時五十分 四分	一時五十分 九分	一時五十分 四分
還房	午後四時 五十八分	五時二十 二分	五時五十分 四分	六時二十 八分	六時五十分 八分	七時十四 分	七時〇九 分	六時四十分 四分
服役時 間合計	六時二十 八分	六時五十 七分	七時三十 五分	八時三十 八分	八時五十 九分	九時〇五 分	八時四十 九分	八時〇四 分

四百四十

額ニ超過セシ 時ハ不得止ニ 付已決囚諸費 ノ内某代其他 ノ有餘ヲ以テ 支辨不苦哉 第十條 傭工錢 收入區分方ノ 儀ハ明文無之 ニヨリ實際集 治監ニ入ル可 ＊囚徒ノ收入 ハ國庫費ニ差 繼キ府縣獄ニ 入ル可キ囚徒 收入ハ地方稅 雜收入ニ取扱 ヒ來リ候ヘ用 不用品ノ賣却 代及ヒ罰俸沒 收入金等ハ渾				
九月	十月	十一月	十二月	約子日出
五時四十分 八分	六時二十 二分	六時五十分 二分	七時〇八 分	約子日出 約七時
六時四十分 八分	七時二十 二分	七時五十 二分	八時〇八 分	約七時
第九時五分 十分	第十時五分 十分	同上	第十時五分 十分	約七時
十二時 十分	同上	同上	十二時五分 十分	約七時
四時二十 分	三時四十 分	三時二十 分	同上	約七時
一時五十分 一分	一時四十 九分	一時四十 八分	一時二十 二分	約七時
六時十一 分	五時三十 七分	五時〇八 分	四時五十 二分	約七時
八時十二 分	七時〇三 分	六時十三 分	六時十二 分	約七時

第六編〇治罪〇第二類〇監獄〇監獄則

四百四十一

テ地方税ノ雜  
收トシ可然哉  
第十一條 徒刑  
ノ女囚無之時  
ハ女監取締ノ  
給料ハ國庫へ  
配算セサル儀  
ニ可有之哉  
○内務省指令  
十六年九月  
十九日

第一條 本支署  
費用區分ニ及  
ハス  
第二條 第三條  
前條指令ニ據  
ルヘシ

第四條 伺之通  
第五條 一日中  
出入アルモ各  
一人ト爲スヘ

故二月毎  
テ平均シ  
テ姑ク其  
世床ノ刻  
ヲ各官此  
獄官分テ  
準ノ區ナ  
宜クテ囚  
シテ役ス  
シテ過ス  
ハ

○第二節 監署雜則

明治十四年三月内  
務省乙第十五號達

監署雜則并ニ書記看守長以下分掌例及ヒ備人分課例別紙ノ通相定候  
條此旨相達候事

雜則

第一條 官吏備人ヲ問ハ、漫リニ在監人ト談言シ又ハ其聽得可キ所  
ニ於テ檢束上ニ係ルコトヲ辨論シ若クハ雜話等ヲ爲スヲ禁ス  
第二條 授業手及ヒ押丁ヲ備フニハ必ス保人ノ押印ヲ具シタル證書  
ヲ納レシムヘシ但證書ニハ監署ノ規則ヲ遵奉シ特ニ在監人ノ囑託  
ヲ受ケ他人ニ通信シ或ハ物件ノ贈答ニ媒介セサルコトヲ詳記セシム

但未決囚ヨリ  
已決囚トナル  
モノ及本支署  
移轉スルモノ  
、如キ一日中  
相跨ル者其當  
日ハ出ノ方ヲ  
扣除シ入ノ方  
ヲ増加スヘシ  
第六條 區分シ  
難キ費用ノミ  
混併シ先ツ未  
決囚ニ係ル分  
ヲ省キ其餘已  
決總囚員ヲ以  
テ算出區分ス  
ヘシ  
第七條 前條指  
令ニ據ルヘシ  
第八條 實際支

第三條 官廳若クハ人民ヨリ服役ノ囚徒ヲ工事ニ備役セント求ムル  
コトアルトキハ便否得失ヲ考ヘ條約ヲナシテ其求ニ應スヘシ  
第四條 在監人死亡シ假葬シタル遺骸ヲ改葬セント監署ニ請フ者ア  
ルトキハ之ヲ許可シ其旨ヲ警察官ニ通告スヘシ  
書記看守長以下分掌例  
一 在監人ノ名籍ヲ調理シ囚徒ノ携有物ヲ檢收シ工業ニ關スル庶  
用ヲ辨シ簿計其他ノ署務ヲ分掌ス  
看守長  
一 看守授業手押丁ノ勤惰ヲ監督シ囚人ノ出入増減病故及ヒ其犯  
則ノ有無ヲ警査シ監房内外ノ洒掃ヲ査閱シ飲食ノ配與器具ノ  
點檢等ニ臨監ス  
二 服役ノ囚ニ課スル工業ノ科程ヲ典獄ニ稟議シ其作業ヲ督勵ス  
看守  
一 晝夜交替シテ受持場ヲ巡警シ及ヒ監門ヲ守リ監外ニ押發ノ囚  
徒ヲ戒護シ病囚ノ醫治ニ立會ヒ日々監中ノ器具ヲ點檢ス

第六編○治罪○第二類○監獄○監署雜則



消シタル月ノ  
囚員ヲ以テ算  
出スヘシ  
第九條 定額ニ  
超過スヘカラ  
サル儀ト心得  
ヘシ  
第十條 不用物  
品賣却代等收  
入區分ノ儀追  
テ何分ノ儀達  
スヘシ  
第十一條 伺之  
通

●警視廳伺  
明治十七年  
六月廿四日  
今般乙第二十九  
號ヲ以テ在府縣  
獄囚徒費取扱方  
ノ儀御達相成候  
スル者ニ限  
テ一時拘留  
メテ微罪ニ  
ル者又ハ極  
推問モ經サ  
未タ初席ノ  
監倉ノ囚ハ  
達ニ依  
省番外  
月司法  
明治六年四  
月十二日司  
法省檢事局  
達ニ依  
省番外  
九年二  
月司法

二服役ノ囚徒作業ニ關セサル他事ヲ交談シ或ハ路人ニ聲語シ或  
ハ漫リニ部外ノ工場ニ入り或ハ押丁等ヲシテ囚徒ト相紐ル、  
ノ狀ナカラシムルヲ要ス若シ犯ス者アルトキハ看守長ニ具狀  
スヘシ  
三文字ヲ書スル能ハサル囚徒ノ爲メニ願訴ノ書面ヲ代書ス  
備八分課例  
教誨師  
一 改過遷善ノ道ヲ講說シテ囚徒ヲ教誨ス  
醫師  
一 囚徒ノ疾病ヲ診察治療シ其癘篤疾若クハ重病急症ニ至レハ診  
斷書ニ處方箋ヲ添ヘ典獄ニ致スヘシ  
二 病囚ノ氏名病性徵候治否及ヒ處方ハ調治簿ニ詳記スヘシ  
三 毎朝一次各監ヲ巡リ囚徒ノ飲食衣類ヲ看視シ健康ニ害アリト  
認ル事アルトキハ改良ノ意見ヲ典獄ニ具狀スヘシ  
四 診察手術ヲ施ストキハ病者ニ向テ攝生ノ方法ヲ示スヘシ  
授業手  
一 服役ノ囚徒ニ農業工藝等ヲ教ヘシム

ル其他ハ一  
切監獄へ送  
付スヘシ  
明治六年七  
月九日司法  
省へ達  
廿三號  
達ヲ以  
テ消ル

處實際ノ取扱上  
ニ於テ集治監ニ  
入ルヘキ囚徒ニ  
對スル費用ハ總  
テ地方費中へ混  
一ニ仕拂置月々  
一囚一日金二十  
錢ノ割合ヲ以テ  
國庫ヨリ支出シ  
タル金額ヲ總支  
出額(混一ノ支  
出高)ニ應シ各  
費目割合地方費  
ノ方へ戻入候テ  
可然哉又ハ國庫  
ヨリ支出ノ金額  
ハ地方稅雜收入  
中へ編入候テ可  
然哉且陸軍監獄  
ヨリ當廳所轄監  
カラストス

九年二  
月司法省  
番外達  
ニ依テ  
消ル

押丁  
一 囚徒監房出入ノ際其身體衣服ヲ搜檢シ服役者ヲ督使シ控繩戒  
護等ニ從事ス  
女監取締  
一 女監ヲ監視シ婦女入監ノ際ハ典獄ノ臨監ヲ得テ其身體衣服ヲ  
搜檢ス  
二 飲食ヲ配與シ及ヒ女囚ノ作業ヲ督勵ス

●第一章 雜

○第一節 別房留置者  
十六年十二月  
第六十號號達

監獄則第三十條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第  
三十條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監  
獄則第七條ニ準擬處分ス可シ此旨相達候事

○第二節 全犯則者處分方  
十六年十二月太政  
官第六十二號達

監獄則第三十條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第  
三十二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監

第六編○治罪○第一類○監獄○別房留置者

九年三月  
月司法  
省番外  
達ニ依  
テ消ル

七年司  
法省甲  
十號達  
ヲ以テ  
消ル

明治六年十月廿四日  
囚徒ニ屬スル費用モ凡テ同様ノ取扱ト相心得可然哉此段相伺候也

追テ本文費用一四一日金二十錢ノ額ヲ以テ仕拂候上ハ備工錢其他ノ收入金ハ悉皆地方稅雜收入へ編入候儀ト見込候也

○内務省指令  
十七年八月十六日

一國庫支出金取扱方ハ陸軍處刑囚ニ係ル分共

獄則第七條ニ準據處分スベシ此旨相達候事

○第三節 賭博犯人服役

十七年一月第十號達

本年第一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ明治十四年九月第十一號達監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニ準シ服役其他ノ方法共總テ該則ニ依テ處分スベシ此旨相達候事

○第四節 換輕禁錮ノ執行

十七年七月司法省丁第二十六號達

罰金ニ換ヘタル輕禁錮執行ノ儀ニ付別紙ノ通内務卿連署ノ上警視廳以下へ相達候條此旨爲心得相達候事

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナルトキハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルヲ得ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第五節 解剖下附方

明治十八年七月內務省甲第二十五號達

監獄則ニ掲グル所ノ刑死者及死亡者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗

同年百  
世三號  
達ニ依  
テ消ル

十年九  
十五號  
達ニ依  
テ消ル

月十四日東京府へ達  
東京府囚人  
加入用六年  
九月中達ノ  
處退テ一定  
ノ規則ヲ立  
ル迄從前ノ  
通有宿無宿  
ニ拘ハラス  
皆官給トス

前段伺ノ通  
一追書ノ趣伺ノ通

●德島縣伺  
明治十七年九月六日  
本年六月御省乙第二十九號同九月乙第三十號ヲ以テ在府縣獄囚徒費取扱方及囚徒假留監へ送致方御達相成候ニ付テハ疑義ノ件左ニ相伺候也

一囚徒在監諸費トシテ一四一日金貳拾錢宛御下付相成候金額ハ裁判宣告ノ日ヨ

ノ用ニ供スルヲ得此旨相達候事

但屍骸剖觀ノ後ハ縫理シテ原體ニ復シ不都合無之様取計ハシムヘシ

○第六節

女囚地方監獄ニ留置スル費用ノ件

十八年九月內務省番外達

懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ從前ノ通國庫費ヨリ支辨候條此旨相達候事

○第七節

囚徒宣告都度報告  
明治十七年七月內務省乙第三十壹號達

今般各所ニ假留監設置相成候條徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒ハ府縣監獄ヨリ直ニ同監へ遞送可致旨相達候處該囚徒宣告ノ都度當省へ報告ノ義ハ監獄則第五十八條ニ依リ從前ノ通可取計此旨相達候事

○第八節

懲役終身ノ囚徒期限內更ニ罪犯ノ者取扱方  
明治十七年八月內務省乙第三十五號達

舊刑法ニテ處斷セラレタル懲役終身ノ囚徒刑期限內更ニ罪ヲ犯シ地

リ國庫費ノ仕  
拂ニ相立可然  
哉

一集治監へ入ル  
ヘキ囚徒裁判  
確定ノ上ハ直  
ニ假留監へ押  
送可致就テハ  
該囚徒途中衣  
服ノ儀都テ獄  
衣着用爲致其  
費用ハ押送費  
ノ仕拂ニ相立  
可然哉

方監獄ニ拘禁中ノ者其裁判確定ノ上ハ本年當省乙第三十號達ニ準シ  
直ニ假留監ニ押送スヘシ此旨相達候事  
但新舊比照ニ依リ新ニ懲役終身ノ刑ニ處セラレタル者モ本文ニ準  
スヘシ

○第九節 囚人護送手續

明治十五年二月  
第十號達

明治六年(十一月)第三百九拾一號并同十年(七月)第四十九號ヲ以テ  
囚人護送規則及ヒ遞傳方相達置候處今般更ニ別冊之通囚人護送遞傳  
方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ廉ハ同日限廢止  
ス此旨相達候事

囚人護送手續

第一條 甲應ヨリ乙廳又ハ集治監へ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣  
告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ  
但一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離拾里以外ニ  
至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告  
人又ハ脱走ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スルモノモ前條ノ手續ニ準  
スヘシ

十年四  
月廿二日司  
法省達九號  
犯罪人他ノ  
府縣ニ於テ  
捕縛ノ上受  
取渡ノ手續  
ヲ定ム

明治八年四  
月廿二日司  
法省達九號

○內務省指令  
十七年九月  
三十日

第一條 刑罰ニ  
算入スヘキ日  
ヨリ國庫支辨  
トスヘシ

明治六年九  
月司法省達  
甲十九號  
他方ノ掛合  
ニ依テ捕縛  
セシ捕縛人  
ハ其捕縛ヲ  
頼シ方ヨリ

明治六年九  
月司法省達  
甲十九號

受取人ヲ出  
サシム

○群馬縣伺  
明治十七年  
六月廿五日

第一條 集治監  
ニ入ルヘキ囚  
徒費用トシテ  
一囚一日ニ付  
金貳拾錢ツ、  
御下附相成候  
金額ハ悉皆仕  
拂惣高へ差繼  
可然哉

第二條 同囚徒  
工錢ハ從前之  
通國庫へ收入  
之義ト心得可  
然哉

第三條 押送費  
ハ一囚一日金  
廿錢ノ外現費

同年內  
月十日內務  
務省丙  
三十二  
號  
司法省裁判  
所並ニ警視  
省ヨリ囚人  
其他引渡ノ  
者有之節ハ  
護衛人差出  
方東京府へ  
打合受取方  
取計ハシム

明治七年五  
月丙三十六

九年內  
務省乙

但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラ

第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ發出日時ハ其  
當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署へ遞報スヘシ

第四條 護送囚人ノ數ハ一行拾名以下トス護送警吏及ヒ細取ノ人員  
ハ適宜タルヘシ

但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ増加スルヲ得

第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテヲ限リトス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ鄉貫氏名刑名又ハ犯罪見込  
書ノ要領及着發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アル  
トキハ該地戶長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人發病スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治療ス  
ヘシ若シ死去スルハ該地戶長ニ埋葬ヲ囑シ(引取人アル者ハ之  
ニ下付ス)醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戶長及ヒ護送警吏連印シ書  
類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署

第六編 治罪 第二類 監獄 囚人護送手續

百三號 御下相成候儀  
達ニテ 囚人其外府  
消ル 縣繼送方本  
九年丙第二  
號達ノ儀ニ  
付再達  
明治八年五  
月廿八日丙  
務省乙  
十一號  
達及十  
年四十  
九號布  
告ニテ  
消ル  
改定ス

御下相成候儀  
ト心得可然哉  
第四條 上告期  
限即宣告済ヨ  
リ三日間及上  
告中ノ諸費ハ  
渾テ未決囚諸  
費ヨリ支拂之儀  
ト心得可然哉  
此段相伺候也  
○内務省指令  
十七年八月  
十六日  
第一條 集治監  
ニ入ルヘキ現  
囚員ニ應シ國  
庫ヨリ支出ノ  
金額ヲ地方稅  
ト併セ支辨ス  
ヘシ  
第二條 地方稅

ニ報告シ仍ホ發出衙署及ヒ送達スヘキ衙署へ報告スヘシ  
但第八條及ヒ本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚護送ヲ遲緩ス可ラス  
第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以  
テ支辨スヘシ  
但繩取ノ備給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費  
用中ニテ支辨スヘシ  
第十一條 第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年  
第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕拂ニ  
立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フヘシ  
第十二條 第二條ニ掲クル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方  
警察費ヲ以テ支辨スヘシ  
第十三條 (明治十五年十二月第六十八號達改正) 護送囚人死没シ引  
取人ナキモ其所持金錢物品(埋葬費ニ足ルモノ)アル者及陸軍隊付  
下士卒海軍下士卒埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラズ尤  
其費額ハ都テ拾圓以内タルベシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省  
ヨリ各自ニ拂戻スヘシ  
第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都

第三條 押送費  
ノ豫算内ヲ以  
テ支辨スヘシ  
但集治監へ  
押送ノ外移  
送ニ係ルモ  
ノハ日額貳  
拾錢ノ内ニ  
包含ス

第四條 上告セ  
サル者ハ裁判  
宣告ノ日ヨリ  
上告ニ係ル者  
ハ刑期ニ算入  
スヘキ日ヨリ  
國庫ノ支辨ト  
スヘシ

和歌山縣伺  
明治十六年  
十月十三日

テ拘留人ノ例ニ依ルベシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ賄臥具點  
燈手數料ヲ併セテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等  
ハ實費支辨スヘシ

○第十節

徒刑流刑禁  
獄囚送致方

明治十七年七月  
內務省乙三十號

今般各假留監設置セラレ候ニ付徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタ  
ル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左ノ通相定候條此旨相達候事  
徒刑流刑禁獄送致方

一 徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束  
セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監へ押送スヘシ  
但本監ノ都合ニヨリ典獄ヨリ其聯合地方へ囚徒押送ノ期ヲ通知  
スルコトアルベシ  
聯合地方區分  
一 兵庫假留監

- 京都府 大阪府 兵庫縣 滋賀縣
- 石川縣 富山縣 福井縣 島根縣
- 鳥取縣 岡山縣 廣島縣 山口縣

監獄費國地兩費  
 一 算出方ノ儀ハ  
 御省十四年乙第  
 三拾四號及十五  
 年乙第五拾三號  
 御達ニ基クヘキ  
 二 付該費ノ支出  
 係ルモノハ則  
 チ國地兩費ノ豫  
 算金額(假令ハ  
 國庫費百圓ト地  
 方費四百圓ト都  
 合五百圓ヲ以テ  
 建築ニ着手スル  
 ノ類)ヲ目的ト  
 致居候處今般集  
 治監ヘ入ヘキ囚  
 徒ノ内七拾二名  
 ハ宮城集治監ヘ  
 押送スヘキ御達  
 ニ從ヒ右押送濟

一 東京假留監	和歌山縣	德島縣	高知縣	愛媛縣
警視廳	神奈川縣	埼玉縣	群馬縣	
千葉縣	茨木縣	栃木縣	三重縣	
愛知縣	靜岡縣	山梨縣	岐阜縣	
長野縣				
一 宮城假留監	新瀨縣	福島縣	宮城縣	岩手縣
青森縣	秋田縣	山形縣		
一 三池假留監	長崎縣	福岡縣	大分縣	佐賀縣
熊本縣	宮崎縣	鹿兒島縣		

○明治十七年七月內務省第三十壹號警視廳府縣(東京府沖繩縣北)達  
 今般各所ニ假留監設置相成候條徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタ  
 ル囚徒ハ府縣監獄ヨリ直ニ同監ヘ遞送可致旨相達候處該囚徒宣告ノ  
 都度當省ヘ報告ノ儀ハ監獄則第五十八條ニ依リ從前ノ通可取計此旨  
 相達候事

ノ上ハ殘囚僅カ四名ニ有之然ルモハ前條兩費支出ノ目的ヲ以テ既ニ着手致候事物ニシ  
 テ該費ノ内既ニ若干金ヲ支拂セシモ(看守押丁及囚徒ノ被服臥具ヲ新調スル爲メ其素  
 品ヲ購買シタルモ未タ調整ヲ了ラサルモノ或ハ建築用材ヲ購求シ目下建築中ニ係ルモ  
 ノ、類)其事物猶半途ニシテ未タ決算ニ至ラサル者ニ在ッテハ忽チ配算ノ目的ヲ失ス  
 ヘク去迎之ヲ悉皆地方費ノ負擔ニ歸セシメントスルモ稍財政上其宜キヲ得サル姿ニ有  
 之處如斯ハ當初ノ目的ニ因循シ已ニ購買シ及購買ノ約束ヲ以テ今更破約シ難キ者ニ限  
 リテハ假令之ヲ現行セサルモ此際決算シテ國地兩費ニ配算可然哉

○內務省指令 十六年十一月廿二日  
 伺之趣ハ實際使用シタル月ノ現囚員ヲ以算出スヘキ事

但建築費ハ囚徒集治監ヘ押送ノ日迄ヲ限リ事業落成ノ上總延人員ニ算入スヘシ

●新潟縣伺 明治十六年七月十三日  
 一 已決囚ニ係ル經費區分ノ儀十四年御省乙第三拾四號御達中懲役人トアルハ禁獄人モ  
 含蓄候哉

一同條但書臨時加給以下五費目ノ如キ總囚ニ關ラサル費項其囚員限リ平均ヲ以テ算出  
 云々トアリ假令ハ一箇月中兩度移轉有之甲ハ刑期終身ノ者ニテ乙ハ府縣獄ニ入ルヘ  
 キ囚徒ニシテ自カラ入費ノ區分判然タルヲ以テ其都度官費或ハ地方費ト直ニ本拂ニ  
 相立可然哉又ハ一箇月中ハ官費地方費ノ區域ヲ不問同一ニ支拂置月末ニ至リ其囚員  
 限リノ平均ニ算出可致儀ニ候哉  
 一 獄署諸費ノ部刑具諸費ノ如キモ刑期終身ノ者及國事犯五年以上ノ者ヘモ分頭割ヲ以  
 テ算出可致儀ニ候哉

一囚人食費ノ如キ(飯米茶代浴湯費雜費)從前當縣ニテハ已未決混淆仕賄置月末ニ至リ已未決延人員ヲ以各費用ヲ算出致來候へ共右ハ已未決兩囚ノ費用ト雖モ已決囚而已ニ割合候儀ニ候哉又ハ已決囚ニ係ル費用而已同囚延人員ニ算出候儀ニ候哉

○內務省指令 十六年八月十八日

第一條 已決囚ニ係ル費用ハ都テ含蓄ス

第二條 後段伺之通

但集治監へ押送ノ費用ハ單ニ支拂フヘシ

第三條 刑具費ハ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニ關係之レナシ

第四條 已決囚ニ係ル費用ノ同囚延人員ヲ以テ算用スヘシ

●岐阜縣伺 明治十七年七月三日

第一條 集治監ニ入ル可キ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者費用交付方今般內務省乙第貳拾九號ヲ以テ御改定相成候ニ付テハ該囚徒費用ハ他ノ囚徒費ト混同支辨シ御交付ノ金員ハ地方稅監獄費及監獄建築修繕費ノ總金額ニ割合各費ニ對スル額ヲ定メ地方稅豫算精算共警察費國庫下渡金ニ準シテ調理シ可然哉

第二條 傭工錢ハ御交付ノ金員へ可差繼哉又ハ地方稅雜收入ニ取計可然哉

第三條 豫算調製方ノ儀ハ前々年度中宣告濟云々トアレモ其以前ヨリ越シ來ル人員アルハ是又算入スル儀ト相心得可然哉

第四條 押送中ノ費用ハ總テ實費ヲ以テ別ニ御下渡可相成儀ト心得可然哉

第五條 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ルモノ、費用モ乙第二十九號御達ニ準スル儀ト相心得可然哉

右相伺候也

○內務省指令

第一條 集治監ニ入ルヘキ現囚員ニ應シ國庫ヨリ支出ノ金額ヲ地方稅ト併セ支辨シ地方稅豫算議案及精算報告書ハ國庫金ヲ扣除整理スヘシ

第二條 地方稅へ收入スヘシ

第三條 前々年度中宣告濟ノ人員ニ限ル

第四條 押送費ノ豫算内ヲ以テ支辨スヘシ

但集治監へ押送ノ外移送ニ係ルモノハ日額金貳拾錢ノ内ニ包含ス

第五條 實際ノ場合ニ於テ伺出ヘシ

●鹿兒島縣伺 明治十七年十二月十二日

本年六月御省乙第二十九號ヲ以テ在府縣獄囚徒費取扱方ノ儀御達相成候處實際ノ取扱上ニ於テ疑義ヲ生シ候件々左ニ

第一條 本年六月廿四日警視廳伺(官報第三百四十五號ニ載ス)集治監ニ入ルヘキ囚徒ニ對スル費用ハ總テ地方費中へ混一ニ仕拂置キ月々其現人員ニ應シ一囚一日金貳拾錢ノ割合ヲ以テ國庫ヨリ支出シタル金額ヲ總支出額(混一ノ支出高)ニ應シ各費目ニ割合地方費ノ方へ戻入候テ可然哉又ハ云々ト云フノ項ニ對シ前段伺ノ通ト御指令有之右各費目トハ監獄中未決囚諸費ヲ除キ俸給雜給應費已決囚諸費及ヒ監獄建築修繕費中未決監ニ係ル部分ヲ除キ已決檻建築修繕費ノ總金額ニ割合地方費ノ方へ戻入候儀ト相心得可然哉

第二條 本年七月三日岐阜縣伺(官報第三百八拾四號ニ載ス)第一條末文地方稅豫算精算共警察費國庫下渡金ニ準シテ調理シ可然哉ト云フノ項ニ對シ地方稅豫算議案及精算報告書ハ國庫金ヲ扣除整理スヘシト御指令有之右豫算議案ヲ調費スルニ當リ各費

第六編 ○治罪 ○第二類 ○監獄 ○囚人送手續續

目(前條ノ各費目ヲ指スニ就キ扣除スヘキ國庫支出ノ員額ハ在府縣獄囚徒費ノ豫算高ヲ以テ各費目(同上)ノ豫算惣額ニ應シ算出致候儀ト相心得可然哉

○內務省指令 十八年四月一日

書面伺之通

●警視廳伺 明治十七年十月十日

在府縣獄囚徒費ヨリ支出ノ金額ヲ地方監獄費ヘ戻入方ノ儀ハ會テ伺定ノ趣モ有之候處尙熟考候ニ總支出額ニ應シ戻入候ハ少シク不穩當ニモ有之候付一四一日金廿錢ノ割合ヲ以テ國庫ヨリ支出ノ金額ハ監獄費總支出高ノ內未決囚諸費ヲ除去シ而シテ當廳ノ如キハ監獄分署ヲ鍛冶橋市ケ谷石川島ノ三箇所ニ分離相成居候ニ付集治監ニ入ルヘキ囚徒ノ現ニ入監セシ分署限リノ費額ニ應シ各費目ニ割合地方費ノ方ヘ戻入候様致シ度然ルルハ實際取扱上至便ノ儀ト思考候ニ付此段及上申候也

○內務省指令 伺之通 十七年十一月一日

●千葉縣伺 明治十八年五月日

本年第貳號公布ニ依リ輕罪ニ係ル被告人控訴ヲ爲セントキ拘禁中之諸費及裁決後已決囚ニ屬スル諸費ハ最前裁判言渡シアリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨シ其費用交付方ハ客年御省乙第貳拾九號達ニ準據シ可取計旨本年(四月)甲第拾三號ヲ以テ御達ノ趣モ有之就テハ該囚工錢ハ在府縣監獄囚徒ト等シク就業地方ノ地方稅ヘ收入候儀ニ可有之哉

○內務省指令 十八年五月三十日

●石川縣伺 明治十六年十一月廿二日

今回御省乙第卅八號ヲ以テ地方國庫ノ兩費ニテ購入セシ監房常置ノ器具ヲ始メ戒具雜

具等不用物品賣拂代金及ヒ看守罰俸金等十五年度以降集治監ニ生セシモノハ國庫ヘ警視廳及ヒ府縣ニ生セシモノハ地方稅ヘ收入スヘキ旨御達相成候處囚徒雇工錢ノ儀ハ右御達ノ限リニハ無之十四年御省等乙第三拾四號御達計算法ニ據リ割合兩費(國庫費ト地方費ヲ指ス以下兩費トアルハ皆全シ)ヘ收入スヘキ哉ニ被存別紙寫ノ通電報ヲ以テ伺御指令有之然ル處本年十一月七日官報第百九號ノ表大坂府ヨリ囚徒費區分方伺第二條ヘ御指令ノ趣勘味候處工錢並遺留品賣却代モ乙第三十八號御達ノ通處分各監(集治監並警視廳及ヒ府縣ヲ云フ)限リニ收入割合ニ及ハス儀ニ可有之哉ニ推考致候果シテ然ラハ曩ニ本縣ヨリ伺御指令ト支吾致シ前顯乙第三十八號御達ハ雇工錢等雜收入共渾テ割合兩費ヘ收入スルニ及ハス其集監治ニ生セシモノハ國庫ヘ警視廳府縣ニ生セシモノハ地方費ヘ收入候儀ニ可有之哉更ニ疑惑ヲ生シ候ニ付尙又此旨相伺候也

○內務省指令 十六年十二月十二日

工錢收入ハ最前指令ノ通尤領置工錢ノ沒收金トナルルハ乙第三十八號達ニ據ルヘシ(別紙) 同縣伺 十六年十月九日

已決囚雇工錢收入區分ハ今般乙第三十八號御達ノ外ナルヤ 指令 十六年十月十八日

伺之通

●山形縣伺 明治十六年十月八日

明治十四年七月二十一日附乙第三拾四號ヲ以テ御達中但書ニ臨時加給療養費埋葬費寫眞費移轉費ノ如キ總囚ニ關ラサル費項ハ其囚員限リノ平均ヲ以テ算出スヘシト有之其  
他ノ明文ハ無之候得共工業費ノ如キハ各種ノ區分ヲ成サスシテ各囚動ノ延人頭ニ宛收支共算出候ルハ穩當ナラサル様思考候間矢張各種役業限リノ人頭ニ收支共割宛算出候

テ可然哉此段相伺候也

○内務省指令 十六年十一月廿八日

伺之趣役業ノ何タルヲ問ハス定役ニ服ス可キ已決總囚員ノ延數ニ平均算出スヘシ  
但定役ニ服セサル處刑ノ囚徒ト雖其役ニ就カシムルハ本文延數ニ算入スヘシ

●岐阜縣伺 明治十六年十月廿九日

本年九月乙第三拾八號ヲ以國庫下付金及地方稅受入金ヲ以混一ノ上罪囚ノ刑期ニ區分  
十四年内務大藏兩省達乙第三拾四號計算法ニ照據購入セシ監房常置ノ器具ヲ始メ戒具  
雜具等不用物品賣拂代及看守罰俸金等納入方之儀御達相成候處右ニ獄舎其他地所建物  
ハ明文無之候得共素ヨリ該計算法ニ依リ支出シタル者ニ付若シ不用ニ屬シ賣却シタル  
片ハ乙第三十八號御達ニ準據取扱可然ト存候此段相伺候也

○内務省指令 十六年十一月廿八日  
伺之通

●警視廳伺 明治十七年一月廿五日

諸裁判所内ニ設ケアル留置場之儀監獄則第一條第一項ニ裁判所ニ屬スルモノト有之候  
ニ付該場ニ屬スル營繕費用ハ司法省經費内ヨリ支出相成可然哉旨同省ヘ照會候處該  
省ニ於テ支辨スヘキ筋ニ無之趣回答有之就テハ當廳ニ於テ地方稅中ヨリ支辨スヘキ儀  
ト相心得可然哉果シテ然レハ其敷地ニ係ル地所ハ地方稅ヘ引繼可相成儀ニ有之候哉又  
ハ司法省ヨリ借受候儀ト相心得可然哉此段御伺候也

○内務省指令 十七年二月十八日

伺之趣留置場營繕費ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ敷地ノ儀ハ末段伺ノ通  
●愛媛縣伺 明治十八年五月十四日

御省本年甲第拾三號ヲ以テ輕罪ニ係ル控訴云々其控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中  
ノ諸費ハ總テ最前裁判官渡アリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨ノ儀御達相成候處右甲地  
方則支拂ヲ爲スヘキ地方監獄費ニ於テハ乙地方監獄署在監中ノ日數ニ依リ一日金貳拾  
錢ヲ以テ支拂其精算ハ未決費(裁決後已決囚ニ屬スルモノハ已決費)細科目外別途仕上  
ケニ執計可然哉

且又右金員ヲ受入タル乙地監獄費ニ於テハ國庫下附金同様未決費(裁決後已決囚ニ  
屬スルモノハ已決費)各科目ヘ割當戻シ入レニ執計可然哉

○内務省指令 十八年六月四日

書面前段ハ伺ノ通後段ハ雜收入ヘ編入候儀ト可心得事

●三重縣伺 明治十六年十一月十三日

國庫費支辨ニ係ル囚徒ノ傭工錢及沒收金モ本年乙第三拾八號御達ニ據リ地方稅雜收入  
ヘ受入可然哉

○内務省指令 十六年十一月二十日

工錢收入ハ從前ノ通り尤工錢ト雖モ沒收金ハ伺ノ通り

●山梨縣伺 明治十六年六月八日

一明治十四年御省乙第十六號ヲ以テ司獄官吏設置程度御定相成候儀ノ處當縣ノ如キハ  
小縣中ノ小ナル者ナレハ如何ニモ人少ニシテ理務上差闕不尠就テハ繁忙ノ際ニ限り  
炊事其他役囚ノ作業ニ關スル細事等ニテ全ク等外以下ノ者ヲシテ可爲取扱事務ハ臨  
時雇ヲ置キ給料ノ儀ハ地方稅ヨリ支辨致シ不苦候哉  
一親族無之已決囚人ヨリ舊借返辨ノ爲メ給與金(工錢十分ノ一二)ヲ以テ財主ニ送ラン  
ト願出ル片又ハ伺囚人ヨリ滿期放免ノ際旅費欠乏ノ囚人ヘ旅費ヲ貸與センコト願出



ル者往々有之右等ハ貸借兩主ノ利益亦同囚ノ困難ヲ救助スルハ同囚相憐ムノ情義ニ出テ俱ニ改過遷善ノ行爲ニ付如斯類ハ監獄則第五十五條ニ準據シ取扱可然哉  
一未決在監人ニシテ無罪解放ノ節無籍ニテ頼ルヘキ所ナキ者並ニ旅費欠乏シ進退窘窮ノ者等ハ監獄則第三十條ニ準據シ取扱可然哉

一各警察署ニ於テ勾留ノ刑ニ處セラレタル者ノ食費仕賄及計算方ノ儀ハ一般已決人ノ食費同様可致ハ勿論ノ處隣地ノ警察署ニ至テハ一ヶ月僅カニ一二ノ勾留人アルノミニシテ實際一般ノ成規ニ依リ仕賄ヒ難ク就テハ監獄則第六十八條及ヒ第七十條ノ制限ニ依リ米麥野菜代並ニ雜費等ヲ合シ一般五錢以下ヲ以テ仕賄候儀不苦候哉

○内務省指令 十六年十月十六日

第一項 食糧及ヒ製作品取扱等ノ雜務ニ從事スルモノハ伺ノ通

第二項 前段ノ場合ハ開届不苦後段難相成

第三項 難開届

第四項 開届

●山形縣伺(電報) 明治十八年一月十三日

監獄經理半年報十六號ヨリ十九號迄假出獄ハ掲載スルニ及ハサルヤ

○内務省指令 十八年二月五日

假出獄者ノ掲載方ハ監獄經理半年報第十六號ヨリ第十九號表迄各々掲載スル儀ト心得ヘシ

●福岡縣伺 明治十七年二月四日

客年十二月御省乙第四十八號ヲ以テ御達相成候監獄經理半年報中第十六號ニ自活スルニ足ル以上ノ工技アルモノト有之右ハ監内外ヲ問ハス普通自活スルニ足ル以上ノ工技

即チ大工桶工等ノ如キ諸職工ニシテ在監中衣食費ヲ償フモノヲ指シタルモノニシテ礦夫土方米搗等ノ如キ諸勞作ニ至テハ假令在監中衣食費ヲ償フモノト雖モ自活工技ノ部分ニハ組込難キ儀ニ候哉果シテ然ラハ右等ノ諸勞作ハ總テ無工技トシ取調可然哉

○内務省指令 十七年二月廿二日

伺之趣諸勞作ト雖モ衣食費ヲ償フニ足ルモノハ自活スルニ足ル以上ノ工技アル者ノ界區ニ併記スル儀ト可心得事

●愛媛縣伺 明治十八年七月八日

軍律ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル被告人在監中ノ費用ノ儀ハ明治十六年九月十九日附及ヒ同十七年八月八日附ヲ以テ御達ノ趣モ有之候得共聊カ疑岐ニ涉リ候場合有之候ニ付左ニ相伺候

一陸軍治罪法第十八條初項末項ノ末文ニ依リ地方裁判所ニ於テ軍律ニ照シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル被告人在監中ノ費用ハ陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ又地方稅ノ支辨ニ屬スルヤ

一前項若シ陸軍省ノ支辨ニ屬スル者トスルハ未決在監中ノ費用モ悉ク陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ亦ハ刑名宣告ノ日ヨリ陸軍省ノ支辨トスルヤ

一陸軍治罪法第廿一條末文ニ依リ軍人ニ非サル者陸軍法衙ニ於テ普通刑法ニ照シ刑ノ言渡ヲ受ケシ件在監中ノ費用ハ陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ亦ハ地方稅ノ支辨トスルヤ

○内務省指令 十八年八月一日

第一二項 普通裁判所ノ審判ニ係ル該囚在監中ノ費用ハ總テ地方稅ヨリ支辨スヘシ  
第三項 本年第十二號公布以後普通裁判所ニ於テ處斷シタルモノハ地方稅ヨリ支辨スヘシ

但同種ノ罪囚ト雖モ本文公布以前ニ在テ軍法會議ニ於テ處斷シ該衙ヨリ送付シタ  
ル囚徒ニ係ル費用ハ陸軍省ノ支辨トス

●静岡縣伺 明治十八年十一月二十一日

假ニ懲罰ヲ免シ出獄セシメタルモノ主刑滿期迄ニ過料金納完スル能ハサル場合ニ於テ  
ハ更ニ入獄セシメ其換罰ヲ執行シ可然哉

○内務省指令 十八年十一月二十七日  
伺之通

●岡山縣伺 明治十八年十一月七日

本年御省甲第二十五號ヲ以監獄則ニ掲クル所ノ刑死者及ヒ死亡者ニシテ親屬故舊其遺  
骸ノ下付ヲ請フ者ナキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗ノ用ニ供  
スル云々ノ儀御達相成候ニ付テハ右刑死者等解剖施行ノ節ハ同達但書ノ通死骸剖觀後  
縫理シテ原體ニ復シ不都合無之様可致ハ無論ノ義ニ有之候得共縫理原體ニ復セシ上ハ  
適宜埋葬若クハ火葬ニ取計可然哉

○内務省 明治十八年十二月一日

伺ノ趣原體ニ縫復セシ上ハ典獄ニ於テ監獄則第七十九條第二項ニ從ヒ假葬スヘキ儀  
ト可心得事

●栃木縣伺 明治十八年十月八日

第一條 本年七月御省甲第二十五號御達ニ刑死者及病死者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下  
付ヲ請フ者ナキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ解剖實驗ノ用ニ供スルヲ得ト有  
之候處右ハ監獄則第七十九條第一項ニ依リ其死亡シタル時限ヨリ二十四時以内ニ遺  
骸ノ下付ヲ乞フ者ナケレハ直ニ解剖スルトセハ親屬故舊遠地ニ在ル者ハ或ハ失望

ノ掛念アルニ付時限ニ關セズ全ク遺骸ノ下付ヲ出願セサル者ニ限り解剖差許ス儀ト  
心得可然哉

第二條 前條遺骸解剖ノ儀ハ曩ニ刑死者遺骸ノ下付ヲ乞フモノナキモ、外何人ニ不  
拘本人ノ情願ニアラサル者ト其遺屬者ノ承諾ヲ得サル者トハ解剖不相成旨神奈川縣

ヘ御指令ノ趣モ有之候處甲第二十五號御達ニ依レハ死者ノ情願並ニ遺屬者ノ承諾ヲ  
要セサル儀ト心得可然哉

○内務省指令 十八年十月二十三日

伺之趣左ノ通可心得事

第一條 伺ノ通

但既ニ二十四時間ヲ過キ假埋葬セシモノハ解剖ヲ許スヘカラサル者トス  
第二條 伺ノ通

●神奈川縣伺 明治十八年十月三日

死刑執行ノ者衣服ノ儀ハ監獄則第三十三條ニ依リ考案ヲ下スニ犯人自服ノ儘執行シ可  
然モノト相考居リ候處昨十七年十二月山梨縣ヨリ伺ニ既ニ執行ノ命令アリタルハ獄  
衣ヲ着セ執行可致儀ニ候哉伺ノ通ト御指令有之就テハ司法卿ヨリ執行ノ命令アリタル  
ハ直チニ緒色ノ獄衣ヲ着セ已決監ニ移スヘキ儀ニ候哉又ハ執行ノ日迄ハ未決監ニ置  
キ其當日ニ至リ獄衣ヲ着セ執行ス可キ儀ニ可有之哉

○内務省指令 明治十八年十月二十八日

伺之趣死刑執行迄便宜未決監ニ拘置スルモ苦カラス衣服ハ獄衣ヲ着セシムルニ及ハ  
サル儀ト可心得事

但山梨縣ヘノ指令ハ取消候儀ト可心得事

●福岡縣伺 明治十八年十月二十八日  
 定役ニ服スル在監人食糧ノ儀ハ監獄則第六十八條ノ制限ニ隨ヒ給與スヘキハ勿論ニ候  
 處各種ノ工藝上ニ就キ之ヲ實檢スルニ譬ヘハ鍛冶工綿打工ノ如キハ強キ力業トシ從來  
 七合食ヲ與ヘ來リシカ之ヲ米麥搗若シクハ開墾耕耘等ノ作業ニ比スルニ稍輕キモノト  
 認メラル然ラハ之ヲ座作業ナル藁工時計工ノ類ト同視シ輕役五合ノ食ヲ給セン歟又不  
 權衡タルヲ覺ユ斯ノ如ク強役中ニモ力業ノ稍輕キモノハ其強役食七合幾分ヲ減シ給與  
 致シ不苦候哉

○內務省指令 十八年十一月十一日  
 伺ノ通

●群馬縣伺 十八年十月二日  
 已決囚ノ監獄署ヘ入監ノ節携有スル財貨物件ハ點檢ノ上領置シ釋放ノ時其儘還付致來  
 候然ルニ該金ノ內天保錢又ハ閉店銀行紙幣ノ如キハ引換期限ヲ要スル者モ可有之果シ  
 テ然ラハ釋放ノ遲速ニ由リ出獄スルノ際還付スルモ早已ニ不通用ニ相成候テハ折角保  
 管ノ旨趣モ無之何分不都合ノ儀ト被存候條物品又ハ金銀貨(古金銀)ヲ除クノ外ハ最前預  
 リタル紙幣ノ種類ヲ論セテ現今通用ノ紙幣又ハ銅貨等ヲ以テ還付スヘキ様取計差支無  
 之儀ト被存候得共爲念相伺候  
 (指令) 十八年十月九日  
 伺ノ趣ハ其旨本人ヘ申聞タル上期限前ニ引換置キ還付スヘキ儀ト可心得事

○第十一節

舊刑法ニテ國事犯禁獄五十九年六月內務  
 年以上ノ者假留監ヘ押送 省訓令第十一號

明治十四年 七月內務大 藏兩省乙三 十四號達	明治十四年 九月內務省 乙四十二號	本年七月乙 第三十四號 達中へ追加 字ノ事	明治十五年 十月內務省
明治十四年 七月內務大 藏兩省乙三 十四號達	本年第七號 公布已決囚 ニ係ル經費 區分等被定 ニ付實地取 消ル	計心得方	全上
明治十七年三月內 務省乙第九號達	明治十七年六月內 務省乙二十 九號達	ニ依テ	全上

●岡山縣伺

十九年五月  
四日  
一押送費ハ豫メ  
期定シ難キ支  
出ニシテ從來  
各警察署ニ於  
テ一時繰換仕  
拂置一ヶ月分

舊刑法ニテ國事犯禁獄懲役五年以上及ヒ常事犯禁獄終身ニ處セラレ  
 タル囚徒地方監獄ニ拘禁ノ者ハ十七年當省乙第三十號達ニ準シ直ニ  
 假留監ヘ押送スヘシ

○第十二節

監視票携帯ノ件

明治十七年三月內  
務省乙第九號達

監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルハ必ス監視票ヲ携帯セ  
 シメ其滞留數日ニ涉ル者ハ滞留地ノ警察署ニ到リ謹慎ヲ表シ官吏ノ  
 認印ヲ受ケシム可シ此旨相達候事

但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄内ニ捺印スヘシ

○第十三節

在府縣獄囚  
徒費取扱方

明治十七年六月內  
務省乙第二十九號達

在府縣獄囚徒費取扱方左ノ通改定候條十七年度ヨリ施行スヘシ此旨  
 相達候事

但十四年七月內務大藏兩省乙第三十四號同年九月乙第四拾二號十  
 五年十月乙第五拾三號之達ハ十六年度限り廢止ス

一集治監ニ入ルヘギ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者檢束衣食一切從前ノ獄  
費已決  
 當諸費ノ費用トシテ一囚一日ニ付金二拾錢ヲ交付スヘシ

乙第五十三  
號達  
集治監ニ入  
ルヘキ囚徒  
費用支辨方

一、取纏メ該署ヨリ請求セシメ仕拂候處今般歳入歳出出納規則執行ニ付該規則ニ據ルルハ各受取人ニ對シテ之ヲ交付スヘキモ隔地ニシテ其時々執行シ難キ無止儀ニ付從來ノ通繰換サセ其請求人即チ警察署長ニ對シ仕拂切符ヲ交付シ可然哉  
一囚徒在監諸費ノ儀モ地方費

但朝夕出入アルモ各一日ヲ以テ計算スヘシ  
一十四年十月乙第五拾三號達之内現員表ハ差出ニ不及前々年度中宣告濟人員ニヨリ左ノ科目表ニ照準豫算帳調整定期ノ通差出スヘシ  
但十七年度分ハ差出ニ及ハス

改定科目

大科目	中科目	小科目	細科目	備考
在府縣獄囚徒費				
		囚徒在監諸費		從前ノ獄器費已決囚諸費當繕費ヲ決算スルノ科目ナリ
		押送費		集治監へ押送費用ヲ決算スルノ科目ナリ(途中ノ衣服代ハ茲ニ記入ス)

第十四節

檢事ヨリ差出スヘキ收監表ノ件  
十九年五月司法省第二號訓令

明治十五年十二月當省第六七八〇號内訓但書ニ從ヒ檢事ヨリ差出スヘキ收監表ハ自今所轄控訴裁判所檢事長ニ差出スヘシ又檢事長ハ之

監獄費ニ混一ニ仕賄フヘキモノニテ之ニ對スル受取人區分シ難キニ由リ規則第十九條ニ據リ現金支拂ヲ貴省へ請求スヘキ儀ニ候哉

内務省指令

十九年五月十四日

一 移轉費正當受取人ニ對シ仕拂切符發行シ難キ分ハ警察署へ概算ヲ以テ交付スヘシ  
一 囚徒在監費ハ本年四月二十

ヲ取纏メ三月毎ニ一紙表ヲ製シ當省へ差出シ且ツ意見アル時ハ之ヲ附記スヘシ  
但收監表離形ハ各檢事長ニ於テ適宜ニ之ヲ定ムヘキモノトス  
右訓令ス

第十五節

控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費支辨方  
明治十八年四月内務省第十三號達

輕罪ニ係ル控訴之儀ニ付本年第二號ヲ以テ公布相成候付テハ控訴裁判所管轄區域内各地方ヨリ控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判官渡アリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨シ其費用交付方等ハ客年當省乙第二拾九號達ニ準據シ可取計此旨相達候事  
但控訴裁決後已決囚ニ屬スル諸費モ本文同様可心得事

第十六節

假出獄中重罪輕罪ヲ犯シタル者處分手續  
十八年九月司法省丙第七號達

假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルルハ左ノ手續ニ依リ處分スヘシ此旨相達候事  
假出獄停止手續  
第一條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定

八日訓令但書  
ノ通  
但十九年度  
以降ハ押送  
費ヲ移轉費  
囚徒在監諸  
費ヲ囚徒在  
監費ト改ム

ノ後現ニ之ヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ直チニ假出獄ノ停止ヲ申渡  
シ當初下付シタル假出獄ノ證票ヲ取上クヘシ  
第二條 典獄ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ其事狀ヲ具シ内務司  
法兩卿ニ開申スヘシ

第三條 甲地方ニ於テ假出獄ヲ許シタル者ヲ乙地方ニ於テ停止シタ  
ルトキハ乙地方典獄ヨリ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ假出獄ノ證  
票ヲ送致スヘシ

第四條 前條ノ場合ニ於テ乙地方監獄ニ拘禁スルトキハ其監ノ新入  
者トナシ本刑後刑共乙地方ニ於テ執行スヘシ

假出獄停止申渡書式

刑名

府縣族籍

何 某

年齡

其方儀受刑以來獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀著明ナルニ由リ何年 月  
日假出獄ヲ許シ其證票ヲ與ヘタル處復タ重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就  
クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證票取上候事

某集治監  
監獄署

年 月 日

典獄 何 某印  
甲地方ニ於テ假出獄ヲ許シタル者ヲ乙地方ニ於テ停止ノ申渡ヲ  
爲ストキノ書式

府縣族籍

何 某

年齡

其方儀何年 月 日某集治監ニ於テ假出獄ヲ許シ其證票ヲ與ヘタ  
ル處復タ重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證票取  
上候事

某集治監  
監獄署

典獄 何 某印

年 月 日

第三類 [軍律]

第一章 陸軍

第一節 陸軍治罪法

十六年八月第二  
十四號布告

陸軍治罪法目錄

第一章 總則  
 自第一條 至第六條  
 自第七條 至第十二條  
 自第十三條 至第二十三條  
 自第二十四條 至第三十五條  
 自第三十六條 至第五十四條  
 自第五十五條 至第七十四條

第二章 軍法會議ノ構成  
 自第十三條 至第二十三條

第三章 軍法會議ノ權限  
 自第二十四條 至第三十五條

第四章 陸軍檢察  
 自第三十六條 至第五十四條

第五章 審問  
 自第五十五條 至第七十四條

第六章 判決  
 自第七十四條 至第七十四條

陸軍治罪法

第一章 總則

第一條 陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
 軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償  
 ハ此限ニ在ラス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限リ之  
 ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令

官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百  
 條第一百一條ノ規則ハ治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判  
 ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第七條 軍法會議ハ各軍管ニ一箇若クハ數箇ヲ設ク  
 軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ケ合圍ノ地ニモ亦軍法  
 會議ヲ設ク

第八條 軍法會議ニハ判士長判士理事理事補錄事ヲ置ク

第九條 (十九年二月内閣第五號布告ヲ以テ改正)  
 軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官四名ヲ以テ判士トス但被  
 告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士  
 長判士ヲ更換ス

判士	長	判士	被	告	人
佐官	一名	大尉若クハ中尉	二名	陸海軍少尉准士官及ヒ	
佐官	一名	少尉	二名	同等ノ軍人	
佐官	一名	中尉	二名	陸海軍中尉及ヒ	
			二名	同等ノ軍人	
			二名	陸海軍中尉及ヒ	
			二名	同等ノ軍人	

大佐若クハ中佐	一名	少佐	二名	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐	一名	中尉	二名	陸海軍及ヒ少佐
少將	一名	大佐	二名	陸海軍中佐及ヒ
中將	一名	少將	二名	陸海軍大佐及ヒ
中將	一名	中將	二名	陸海軍少將及ヒ
大將	一名	大將	二名	陸海軍中將及ヒ
大將	一名	大將	二名	陸海軍大將及ヒ

第十條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

佐官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦同シ

第十一條 軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命スルコトヲ得又理事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ錄事缺員スル時ハ下士ニ命シテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得

臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若クハ其地ニ在

ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得

第十二條 軍管軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令官ノ上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 軍法會議ハ其軍管若クハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス

第十四條 軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得

第十五條 軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地内ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ被告人ヲ逮捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十六條 軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ審判ス

第十七條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十八條 軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人軍屬ト共犯ニ係ル時モ亦同シ

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之レヲ審判ス

第二十一條 陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス

第二十三條 軍中若シクハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ

管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

第四章 陸軍檢察

第二十四條 陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務ヲ行フ

要塞副官若クハ衛戍副官

憲兵ノ將校下士

衛兵司令

砲兵工兵ノ監護

第二十六條 要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各所管ノ長官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

理事其職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十七條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所屬ノ長官隊長



若クハ司法檢察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ第二

十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯

ス者アルコトヲ知リタル時ハ其職務ヲ行フノ地ノ陸軍檢察官若ク

ハ被告人所屬ノ長官隊長ニ告發ス可シ

第三十條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮  
捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若ク  
ハ巡查ニ交付スヘシ

第三十一條 司法警察官憲兵卒及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若ク  
ハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致ス可シ

第三十二條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ陸  
軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ交付ス可シ

第三十三條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更センコ  
トヲ請求スルコトヲ得

第三十四條 陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタ

ル時ハ直ニ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ル  
可シ

其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ

第三十五條 陸軍檢察官要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長  
各所官ノ長官檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り証憑文書ヲ添  
ヘ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五章 審問

第三十六條 十九年二月（内閣第五號布告左ノ如ク改正ス）

司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外審判ノ命  
令ヲ下シ其事件ヲ理事ニ下付ス可シ

被告人上長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申ス可シ  
營所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ  
具申ス可シ

第三十七條 陸軍卿審判ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ  
司令官ハ之ヲ理事ニ下付ス可シ

第三十八條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告ハノ官  
等ニ拘ハラス直ニ其審問ノ命令ヲ下スコトヲ得

第三十九條 理事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十條 理事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十一條 理事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走ノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ拘引狀ヲ發ス可シ

第四十二條 理事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ陸軍檢察官若クハ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十三條 理事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十四條 理事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所檢事長ニ人相

書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

第四十五條 理事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ収禁狀ヲ發スルコトヲ得

収禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其収禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ収禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條 理事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ理事若シクハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十七條 理事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係スル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條 理事ハ証人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

証人皇族若クハ勅任官ナル時ハ理事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

証人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ理事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

証人若シ遠隔ノ地ニ住ナル時ハ其地ノ理事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 理事ハ被告人及ヒ証人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ証人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記スヘシ

被告人及ヒ証人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルコトヲ得

第五十條 理事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十一條 理事ハ証人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシメテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但理事ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

証人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科スヘシ

第五十二條 証人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第廿七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦審事之ヲ命ス

第五十三條 理事審問ニ於テ共犯若クハ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ直チニ之ヲ審問スヘシ但共犯ノ官等其審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル者ニ係ル時ハ之ヲ司令官ニ具申スヘシ(全上改正)

第五十四條 理事審問ヲ終リ若クハ審問ヲ爲サスシテ直チニ判決ニ付ス可キ時ハ意見書ヲ作り會議ノ日時ヲ定メ訴訟文書ト共ニ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報スヘシ

其事件不問ニ付ス可キモノハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ(全上改正)

第五十五條 削除

第五十六條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士理事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシメ之ヲ訊問シ若クハ判士ヲシテ其訊問ヲ爲サシム可シ(全上改正)

第五十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ

命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第五十八條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時

ハ之ヲ引致ス可シ但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第五十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ

出廷セズ若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席

裁判ヲ爲ス可シ

第六十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出

廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十一條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中闕席シタル者アリ

ト雖出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十二條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判

士ニ命シテ訊問セシム可シ

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認

メタル時ハ判士長ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命

シテ訊問ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士

長ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ共犯若クハ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ直チニ其裁判ヲ爲シ

若クハ會議ヲ中止シ理事ニ移シテ其審問ヲ爲サシム可シ但共犯ノ

官等其審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル

者ニ係ル時ハ判士長之ヲ司令官ニ具申ス可シ(十九年二月第六號

ヲ以テ改正ス)

若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ但判士長

ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第六十四條 被告人及ヒ証人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告

人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ

告ケ被告人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之

ヲ作り判士長判士理事錄事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付

ス理事ハ訴訟文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ証憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ

記ス

二無罪ノ判決書ニハ被告事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ  
犯罪ノ証憑備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタル  
コト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四被告人ノ官位勳等隊號職名氏族籍年齡住所及ヒ軍法會議判決  
ノ年月日ヲ記ス

第六十六條 司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ  
請ヒ其他ハ之ヲ專決ス但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令  
官ニ上申ス可シ

死刑

上長官以上ノ重罪輕罪  
士官ノ重罪

第六十七條 司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事  
件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ  
第六十八條 陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量

スル時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者  
ハ上奏シテ命ヲ請フヘシ

第六十九條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士錄事法廷ニ臨  
ニ被告人ヲ出廷セシメ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十條 闕席裁判ニ係ル刑ノ宣告ハ軍法會議ノ門前ニ掲示ス可シ  
第七十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其他ノ司令官ハ第六十六  
條ノ權限ニ拘ハラズ直ニ其宣告執行ノ命令ヲ下スヲ得

第七十二條 軍團師團旅團ノ長若クハ合圍ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑  
ノ宣告ヲ受クタル者ニ戴罪服務ヲ命スルヲ得  
但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルヲ得

第七十三條 行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其他ノ司令官ハ時宜ニ依  
リ此治罪法ノ條目ヲ省略執行セシムルヲ得

▲參看 陸軍治罪法第九條 (十六年八月第二十四號布告)  
軍法會議ハ佐官一名ヲ以テ判士長トナシ尉官三名理事理事補ノ

内一名ヲ以テ判士トス  
但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シ  
テ判士長判士ヲ更フ

▲參看 全上第三十六條一項

司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外事件  
ノ難易ニ從ヒ理事ニ下付シ審事ヲシテ其審問ヲ爲サシメ若クハ  
直ニ其判決ニ付スヘシ

▲參看 全上第五十三條

審事審問ニ於テ除罪ヲ覺舉シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問スヘ  
シ

▲參看 全上第五十四條

審事審問ヲ終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添ヘ訴訟文書  
ト共ニ之ヲ理事ニ交付シ理事ハ意見書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申  
スヘシ

▲參看 全上第五十五條

司令官ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴  
訟文書ト共ニ理事ニ下付シ理事ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日

時ヲ判士ニ通報スヘシ

▲參看 全上第六十三條二項

若シ除罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ但判士  
長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

○第二節 罪犯取扱手續

十六年十月陸軍省  
省乙第百二號達

第一條 陸軍檢察官要塞司令官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ

長官監獄長陸軍治罪法ニ從ヒ檢察ノ處分ヲ終リタル時ハ左ノ書類

物品ヲ添ヘ(司令官ノ部下屬セサル諸隊長ニ在テハ各其所管長官ヲ經)司令官ニ具申スヘシ

- 一 被告人調書
  - 二 被害届
  - 三 證人調書
  - 四 證據物品其他參考書類
  - 五 鑑定書
  - 六 檢證調書
  - 七 書類及物品目錄書
- 被告人所屬ノ長官隊長檢察ノ處分ヲナシ具申ヲナストキハ被告人

ノ前罰科素行調書ヲ添フヘシ

第二條 司令官被告事件ヲ審辨シ若クハ理事ノ意見ヲ問ヒ被告事件  
審問ノ命令ヲ下スヘキ者トナスルハ命令書ヲ訴訟書類ト共ニ理事  
ニ下付スヘシ

裁判管轄ニアラサル者及ヒ審問ノ命令ヲ下スヘカラサル者ハ其書  
類ヲ返還スヘシ

審判ノ命令アリタルルハ理事ハ錄事ヲシテ其事件及ヒ所管隊號氏  
名等ヲ帖簿ニ登記セシメ之ヲ審事若クハ判士長ニ交付スヘシ

第三條 審事召喚狀ヲ發スル時被告人軍人軍属ナルルハ其所屬ノ官  
廨若クハ本隊ニ移シテ送付ノ處分ヲ求ムヘシ若シ逃走等ノ恐レ  
ルルハ護送ヲ求ムルコトヲ得但營外居住ノ者ニ係ルルハ直チニ本人  
ニ交付シ出廷セシムルコトヲ得

其地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサルルハ直チニ本人ニ交付シ出廷  
セシムヘシ

召喚狀ヲ受ケ出廷シタル被告人ハ其召喚狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ  
出スヘシ

第四條 審事勾引狀收禁狀ヲ發スルルハ憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシ

ムヘシ憲兵卒之ヲ執行シ若クハ執行スル能ハサルルハ其旨ヲ審事  
ニ報告スヘシ

第五條 被告人管内若クハ隊伍ニ在ルルハ憲兵卒ハ該隊長ニ頼リ勾  
引狀收禁狀ノ執行ヲ求ムヘシ  
隊長ハ速ニ之ニ應セシムヘシ

被告人既ニ監倉ニ在ル者ナルルハ審事收禁狀ヲ監獄長ニ送付シ監  
獄長ハ速ニ其處分ヲ爲シ之ヲ審事ニ報告スヘシ

第六條 召喚狀勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ニ收禁狀ヲ發シ若シ  
クハ留置ヲ命シタルルハ監獄附屬ノ會計卒若クハ憲兵卒ヲシテ監  
獄ニ護送セシムルコトヲ得勾引狀ヲ以テ監獄ニ付スルルハ又同シ

第七條 理事ハ罰金以下ノ刑ニ該ル者ト認ルルト雖モ其被告人遠隔  
ノ地ニ在ル軍人ナルルハ監獄ニ留置クコトヲ得

第八條 理事被告人ニ收禁留置ヲ命シ若クハ之ヲ解キタルルハ被告  
人所屬ノ官廨若クハ本隊及ヒ監獄ニ通報スヘシ奏任以上及ヒ帶勳  
者ニ係ルルハ理事ヲ經由シ司令官ニ上申スヘシ  
司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ但帶勳者ニ係ルルハ勳章年金褫  
奪及ヒ停止取扱手續第九條ニ依リ其處分ヲ爲スヘシ

第九條 証人鑑定人通事ヲ要スル時其証人鑑定人通事ト爲スヘキ者  
軍人軍屬ナル者ハ其所屬ノ官廨若クハ本隊ニ呼出狀ヲ移シテ其出  
廷ヲ求ムヘシ但營外居住ノ者ニ係ル者ハ直チニ本人ニ交付シ出廷  
セシムルコトヲ得其地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサル者ハ直チニ本  
人ニ交付シ出廷セシムヘシ

呼出ニ應シ出廷シタル者ハ其呼出狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ出スヘ  
シ

第十條 審事ハ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊ニ調書ヲ送り前罰科平  
素ノ行狀事實相違ノ有無等ヲ問フヘシ但所屬官廨本隊ノ具申ニ係  
リ事實明瞭ナルモノハ此限ニ在ラズ

第十一條 司令官審問終結ノ上申ヲ受ケ其事件不問ニ付スヘキ者ト  
認ル者ハ命令書ヲ理事ニ下付シ理事ハ錄事ト共ニ法廷ニ臨ミ之レ  
ヲ被告人ニ讀示スヘシ

第十二條 法廷ニ於テ審問ヲ要スル事件發覺スル者ハ判士長理事ニ  
付シ其取調ヲ爲サシムルコトヲ得

理事取調ヲ終リタル者ハ更ニ報告書意見書ヲ出スヘシ  
第十三條 軍法會議ノ判決ハ多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第十四條 被告人証人ノ陳述前ニ陳述シタル所ト異ナル者ハ錄事其  
要領ヲ記錄シ理事ト共ニ署名捺印シ訴訟書類ニ添置クヘシ

第十五條 再議ノ命令ヲ受ケタル軍法會議ニ於テ事實明瞭ニ更ニ  
被告人証人ノ訊問ヲ要セサル者トナス者ハ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得  
其宣告ハ命令ヲ下シタル陸軍卿若クハ司令官宣告書ヲ被告人所在  
ノ地ノ軍法會議ニ移シテ之ヲ爲サシムヘシ

第十六條 判士長令狀ヲ發シ若クハ之ヲ解キタル者ハ第三條第四條  
第八條ノ例ニ從フ

第十七條 贓物犯人ノ手ニ在ル者ハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還  
付スヘシ

損害陸軍官署ニ係ル者ハ請求ヲ待タズ返還賠償ノ處分ヲ爲スヘシ  
第十八條 裁判宣告ノ時傍聽人ノ席ハ左ノ三區ニ別ツ

- 一 將官及ヒ同等官
- 二 上長官及ヒ士官
- 三 下士及ヒ卒

軍屬奏任ハ上長官士官ノ席ニ判任以下ハ下士卒ノ席ニ於テ傍聽セ  
スヘシ



第十九條 無罪免訴若クハ罰金科料ノ宣告アリタルハ理事直チニ  
犯入ヲ放免シ収禁留置ニ係リタル者ナルハ其旨ヲ監獄ニ通報ス  
ヘシ

禁錮拘留ノ宣告アリタルハ監獄ニ交付スヘシ

懲役若クハ剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ニ依リ禁錮ニ處ス  
ル將校軍屬又ヒ懲治場ニ留置スル者ハ普通監獄則定ムル所ノ區別  
ニ從ヒ地方監獄ニ交付シ軍人軍屬ニ非サルハ禁錮拘留ニ處スル  
ト雖モ又地方監獄ニ交付スヘシ

徒流禁獄ノ宣告アリタルハ監獄ニ交付シ之ヲ司令官ニ具申シ司  
令官ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ

前數項ノ處分ヲ爲スルハ裁判宣告書ノ謄本ヲ添フヘシ収禁ニ係ラ  
サル囚人ヲ監獄ニ交付シ其他地方監獄ニ交付スルハ第六條ニ從  
ヒ護送セシムヘシ

第二十條 監視ニ付シタルハ監獄長主刑滿限ノ後宣告書ノ謄本ヲ  
添ヘ犯人ヲ地方警察署ニ交付ス主刑ヲ免シテ止メ監視ニ付シタル  
ハ理事其處分ヲ爲スヘシ

第二十一條 有罪無罪ヲ問ハズ裁判宣告アリタルハ理事宣告書ノ

謄本ヲ添ヘ本人所屬ノ官廳若クハ本隊ニ通報スヘシ

罰金科料ノ宣告アリタルハ理事期限内ニ之ヲ納完セシムヘシ其  
犯人管内居住ノ者ニ係ルハ所屬隊長ニ照會シテ納完セシメ其監  
獄ニ在ルハ監獄長ニ照會シ監獄長之ヲ隊長ニ照會スヘシ

重罪及ヒ剝官ノ宣告アリタルハ若クハ將校軍屬其他ノ官吏官職  
ヲ失フ刑ニ處セラレタルハ理事裁判宣告書ノ謄本ヲ以テ所管ノ  
府縣ニ通報シ死刑ニ處セラレタル者ニ係ルハ第三十條ニ照シ榜  
示公告スヘキヲ照會スヘシ

第二十二條 罰金科料ヲ限内納完セサルハ理事禁錮若クハ拘留ニ  
換ヘンコヲ判士長ニ求メ言渡書ヲ作り録事ト共ニ法庭ニ臨ミ之ヲ  
言渡スヘシ

犯人遠隔ノ地ヘ在ルハ言渡書ヲ其所屬ノ長官若クハ隊長監獄長  
ヲ送致シ執行ヲ求ムヘシ長官隊長監獄長ハ其地ノ監倉若クハ監獄  
ニ於テ執行スヘシ禁錮拘留限内罰金科料ヲ納完シタルハ理事放  
免ノ處分ヲ爲シ之ヲ判士長ニ通知スヘシ長官隊長監獄長ノ執行シ  
タル者ニ係ルトキハ長官隊長監獄長之ヲ放免シ其金圓ヲ理事ニ送  
致シ理事之ヲ判士長ニ通報スヘシ

第二十三條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人死去シタルハ之ヲ徴收セス

第二十四條 録事ハ宣告ノ年月日及ヒ刑名刑期等ヲ遺漏ナク簿冊ニ登記スヘシ

第二十五條 死刑ヲ執行スルハ犯人ヲ刑場ニ護送シ理事録事醫官之ニ會同シ理事死刑ヲ執行スル旨ヲ犯人ニ告示シタル後小銃ヲ以テ之ヲ射殺ス其護送及ヒ執行ハ本人所屬ノ隊兵一小隊ヲ以テシ隊外若クハ其地ニ所屬ノ本隊アラサルハ鎮臺歩兵一小隊ヲ以テ之ニ充ツ

死刑執行ノ期日定ル時ハ理事豫メ之ヲ司令官ニ具申シ司令官前項ニ照シ隊兵出場ノ處分ヲ爲スヘシ

第二十六條 死刑ヲ行フハ憲兵ヲシテ刑場ノ警戒ヲ爲サシメ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サス但理事ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第二十七條 死刑ノ執行畢リタルハ録事其始末書ヲ作り會同ノ官吏ト共ニ之ヲ署名捺印シ軍法會議ニ納ムヘシ

第二十八條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第二十九條

死刑ニ處セラレタル者ノ遺體ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アルハ之ヲ下付ス

第三十條 死刑ヲ執行シタルハ左ノ各所ニ榜示公告スヘシ

刑ヲ宣告シタル軍法會議ノ門前

犯罪地ノ揭示場

犯罪人原籍所在地ノ區戸長役所ノ門前

第三十一條 證人鑑定人通事旅費日當止宿料ヲ要求スルハ刑法附則第四十九條ニ從ヒ支給スヘシ

第三十二條 理事審事録事ノ職務ハ理事ハ判決書ヲ作り會議ニ列シ且軍法會議ニ係ル一切ノ庶務ヲ擔當シ審事ハ被告人證人ヲ訊問シ

證憑ヲ拾收シ録事ハ口供其他犯罪ニ關スル一切ノ書類ヲ作り及ヒ之ヲ保存スヘシ

第六編〇治罪〇第三類〇軍律〇陸軍〇罪犯取扱手續

第三十三條 司令官事變ニ際シ若クハ戰時ニ在テハ此手續及ヒ書式ヲ變更省略執行セシムルコトヲ得

第一號

被告人調書

府(縣)國區(郡)町(村)何番地住  
華士族(平民)某長男(次男)(弟)  
宗門

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

當何月何年何ケ月

犯罪事實云云<sup>問答體或ハ供述體</sup>、  
與年月日襦袢袴下等ニ係ル<sup>ハ</sup>保存期限盜犯ナレハ贓物ノ存不存存セサレハ其品ノ原價買入年月日品質等之ヲ詳記スヘシ但調書中ニ記載シ難キ事項ハ之ヲ別紙ニ記スルモ妨ケナシ

第二號

年月日

被告人氏名印

証人調書

何某何々事件云々<sup>問答體或ハ供述體</sup>

兵種隊號(所管)

證人職官氏名印

第三號

鑑定書

何々事件ニ付何々ノ鑑定ヲ命セラレタルニ由リ左ノ如ク鑑定ス

一何々<sup>手続</sup>診斷<sup>シ</sup>タル處何々<sup>由</sup>理ナルニ付何々<sup>結果</sup>結<sup>ル</sup>果ナルコト明白ナリ<sup>ハ</sup>推測

此他傷ノ輕重大小休業日數現場ノ景况將來治不治ノ徵候等ヲ詳記スルヲ要ス

年月日

鑑定人職官<sup>(職官ナキ者ハ住所)</sup>氏名印

第四號

前罰科素行書

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何年月日刑法何條ニ依リ何刑<sup>刑名</sup>ニ處セラレ

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何罰<sup>懲罰科</sup>ニ處セラレ

一平素行狀云云

年月日

翻書ヲ作  
リタル者職 官氏名印

第五號

被告事件具申書

兵種隊號(所管)

職 官 氏 名

右何々之件ニ付取調候處本犯及ヒ證人ノ陳述其他證據物件等別紙目錄ノ通りニ候間相當ノ御處分相成度候也

年月日

職 官 氏 名印

第六號

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

審問命令書

兵種隊號(所管)

職 官 位 勳 氏 名

右之者何々<sup>名罪</sup>之件訴訟書類並證據差廻候條審問可致候事

年月日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

軍法會議中

第七號

召喚狀

兵種隊號(所管)

職 官 位 勳 氏 名

右ハ何々事件ニ付訊問之儀有之候條何月何日當軍法會議ニ出廷可致者也

年月日

某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印

第八號

勾引狀

兵種隊號(所管)

職 官 位 勳 氏 名

右ハ何々事件訊問之儀有之候條軍法會議ニ勾引スヘキ者也  
但本人潛匿スル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

年月日

某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印

第九號

收禁狀

第六編○治罪○第三類○軍律○陸軍○罪犯取扱手續

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名	
右何々事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ト認ルヲ以テ何所監倉ニ收禁スル者也	
但本人潛匿スル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ	
年 月 日	審事(判士長官)氏名印
第十號	
收禁(留置)並ニ解收通報書	
兵種隊號(所管) 職官位勳氏名	
右何々之件ニ付取調中月日收禁(留置)ノ處分ニ及ヒ(收禁留置致シ候處月日解放)候間此段及御通報候也	
某鎮臺(營所)軍法會議	
年 月 日	審事(判士長官)氏名印
何官廳(何隊)	
御 中	
第十一號	
收禁並解放上申書	

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名	
右何々之件ニ付取調中月日收禁致シ(收禁候處月日解放致シ)候間此段及上申候也	
年 月 日	審事(判士長官)氏名印
某鎮臺(營所)司令官氏名殿	
第十二號	
共犯發覺上申書	
兵種隊號(所管) 職官位勳氏名	
右ハ兵種隊號(所管)職官氏名被告事件取調候處其共犯ナルヲ覺舉致シ候處何分ノ御下命有之度此段及上申候也	
年 月 日	審事(判士長官)氏名印
某鎮臺(營所)司令官氏名殿	
第十三號	
事實前罰科素行照會書	
兵種隊號(所管)	

第六編○治罪○第三類○軍律○陸軍○罪犯取扱手續

職官 氏名  
右被告事件取調候處別紙訊問書之通致供述候事實相違無之哉(且前罰科及平素ノ行狀等)御申越有之度此段及御照會候也

某鎮臺(營所)軍法會議

審事 氏名印

何官廳(何隊)

御中

第十四號

被告人訊問書

本管、

第一號書  
式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官位 勳 氏名

年齡

問其方之本官等ハ前ニ示シタル通ニ相違ナキヤ  
答然リ

問其方ハ前ニ罪ヲ犯シ刑法ノ處分ヲ受ケシコアリヤ

答云々

問勳章從軍記章ヲ賜リタルコアリヤ

答云々

問何々  
犯罪事實

答云々

問、

答、

一 證據物件ヲ示シ

問此品々ハ何々ニ用ヒシ者ナリヤ又ハ某所ニテ盜ニ取リシ物ナルヤ  
(其方ノ所有ナリヤ)、

答、

問右陳述ノ外申立ツベキコナキヤ

答、

年月日

右被告人某ニ讀聞カセタル處陳述シタル所ニ相違ナキ旨相答署名捺印セシニヨリ本官等左ニ署名捺印スル者也

審事 氏名印

被告人其陳述ヲ増減變更  
スヘキコトヲ申立タルハ  
右被告人ニ讀聞セタル所其陳述ヲ増減(變更)ス  
ヘキコトヲ申立タルニ付更ニ其問答ヲ記載スル左ノ如シ

問、、、、、、、

答、、、、、、、

以下總テ前書式ニ同シ

第十五號

檢証調書  
某何々事件ニ付年月日時檢證ノ爲メ何所家屋ニ到リ之ヲ檢スルニ其  
家屋ハ何々<sup>方面構</sup>而何方ノ牆壁ハ何形ニ破壞シ何器ヲ以テ之ヲ毀チ  
タル者ノ如ク以テ人ノ出入ヲ容易ナラシムヘク而足跡泥痕ヲ留メ何  
所ヨリ何室ニ連接スルニヨリ立會人其他何々ト共ニ其室ニ入り之ヲ  
査スルニ何々<sup>(室内ノ景況立)</sup>由此觀之其盜ハ何々<sup>(牆壁ヲ破壞シ之ヨリ入り</sup>  
<sup>者ノ如ク)</sup>ヲ爲シタルコト明瞭ナリ因テ何室ニ於テ見出シタル證據物件  
何々ヲ押収シ其受領証ヲ何々ニ付シ何時ニ檢證處分ヲ終リ本官等署  
名捺印スル者也

年月日

審事氏名印

第十六號

報告書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者被告事件審問ヲ遂ケ候處某年月日時兵營ヲ脱シ何町古着商ニ  
官給品ヲ賣リ其代金若干ヲ旅費ニ充テ某所ニ趣キ某日時某所ニ於テ  
警察官ニ捕ヘラル<sup>(自首或ハ歸投)</sup>又某年月日<sup>(晝或ハ夜或ハ二人以</sup>  
<sup>門戶牆壁ヲ破越損)</sup>何々ヲ窃ミ取リ又某年月日哨兵ニ對シ口論ヲ爲スモ  
<sup>(壞シ鎖鑰ヲ開キ等)</sup>暴行ヲ爲サ、ル旨被告人陳述スト雖用證人氏名ノ陳述及ヒ何々ノ證  
ニ依ルニ暴行ヲ爲シタルコト明瞭ナリ因テ訴訟書類證據相添此段報告  
候也

年月日

審事氏名印

第十七號

審事意見書

職官氏名

右之者被告事件別紙報告書之通ニ有之其何々ノ所爲ハ陸軍刑法第何

條ニ該リ何々ノ所爲ハ普通刑法第何條ニ該リ何々ノ所爲ハ何々ノ證憑ニ依レハ何々シタル者ナリト雖何々ナルヲ以テ刑法ニ問フ可カラサル者(又何々ノ所爲ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免ス可キ者等)此段意見申陳候也

年 月 日

審事 氏名 印

第十八號

理事意見書

兵種隊號(所管)

職 官 位 勳 氏 名

右之者訴訟書類ニ依リ之ヲ審按スルニ逃亡六日ヲ過キ緝捕セラル、ハ陸軍刑法第何條ニ該シ何々ヲ窃取スルハ普通刑法第何條ニ該ス可キモノトス依テ判決ニ付シ(何々ノ所爲ハ何々ニ因リ罪トナラス或ハ何年月ヲ經ルヲ以テ公訴期滿免除ニ屬ス或ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免スヘキ者等トス依テ免訴(被告人收禁留置ニ係ルルハ且放免)可然此段意見上申候也

年 月 日

理事 氏名 印

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

第十九號

判決命令書

兵種隊號(所管)

職 官 位 勳 氏 名

右之者何々之件別紙訴訟書類並ニ証憑差廻シ候條判決可致候事

年 月 日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

軍法會議中

第二十號

証人呼出狀鑑定人通事呼出狀亦之ニ準ス

兵種隊號(所管)

職 官 氏 名

何々被告人住所氏名何々事件ニ付年月日時証人トシテ當軍法會議ニ出廷可致者也

正當事故ヲ證明セズシテ呼出ニ應セサル時ハ法律ニ依リ罰金ヲ科シ又勾引スルヲアルヘシ

証人奏任以上ニ係ルルハ可致ヲ可有之ト爲シ職官氏名殿宛ト爲ス



年月日

某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(理事)氏名印

第二十一號

証人訊問書

兵種隊號(所管)何府縣何國區郡町村番  
地身分職業氏名年齡

職官氏名

年齡

問兵種隊號(所管)(本管)等ハ前ニ示シタル通相違ナキヤ

答然リ

問事實、、、

答、、、

證據物件アレハ之ヲ示シ

問、、、

答、、、

以下被告人訊問書ニ準ス

第二十二號

証人罰金言渡書鑑定人通事  
之ニ準ス

本管、、、

第一號書  
式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年齡

右年月日某被告事件ニ付証人トシテ出廷ヲ命シタル所故ナク呼出ニ  
應セス因テ陸軍治罪法第五十一條陳述ヲ肯セサルハ普通  
刑法第八十條ヲ加フ依リ罰金何圓  
ニ處ス

某鎮臺(營所)軍法會議

審事(判士長官)氏名印

年月日  
第二十三號

免許命令書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者何々ノ件罪トナラス(法律ニ於テ其罪ヲ全免ス)(期滿免除ヲ  
經)(大赦)等云々因テ免許收禁留置ニ  
係ルハ且放免スル者ナリ  
某鎮臺(營所)司令官氏名印

某鎮臺(營所)司令官氏名印



ハ一月内ニ罰金納完セシメ(科料ナレハ)十日内ニ科料納完セシメ(候様御取計相成度此段及御照會候也)

某鎮臺(營所)軍法會議

理事氏名印

年月日

何官廨(何隊)

御中

下士上等卒及軍屬禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失フハ(追テ本犯ハ陸軍刑法第三十條(普通刑法第三十條)ニ依リ官職ヲ失ヒ候間爲念此段申添候也)

重罪及剝官ヲ附加シ若クハ官職ヲ失フ刑ニ處セラレタルハ府縣へ通報書

本管

第一號書式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者別紙裁判宣告書之通何日致處分候條此段及御通知候也  
年月日 某鎮臺(營所)軍法會議印

府(縣)

御中

第二十八號

罰金科料ヲ禁錮ニ換ユル言渡書

兵種隊號(所管)

職官勳位氏名

右之者何々之罪ヲ犯シタルニ依リ年月日若干ノ罰金科料申付ル處一月(十日)ヲ過ルモ未タ納完セサルヲ以テ陸軍刑法第二十七條ニ依リ普通刑法第二十七條第三十條附加ノ罰金ナルハ第四十二條ヲ加フニ照シ輕禁錮(拘留)何日ニ換フル者也

某鎮臺(營所)軍法會議

判士長官氏名印

年月日

死刑執行始末書

本管

第一號書式ニ同シ  
兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年 齡

右之者年月日何所ニ於テ何罪ニヨリ死刑ヲ執行スルニヨリ臨場檢視  
シ其始末ヲ録スル左ノ如シ

一何時何分某軍法會議ニ於テ宣告ヲ爲シ何時何分何隊犯人ヲ護送シ  
刑場ニ來ル

一理事某犯人ニ死刑ヲ執行スル旨ヲ告ケ等外吏ニ命シ何々ヲシテ其  
準備ヲ爲サシム須臾ニシテ準備整フヲ報ス理事乃チ之ヲ小隊長ニ

告ク小隊長射手ニ令ス射手進ンテ何歩ノ地ニ立或ハニ發兩肩ノ間  
ヲ洞ス警官親接反覆熟視絶命ヲ報ス理事更ニ檢査シ之ヲ隊長ニ告

ケ隊長整列ヲ解キ理事何々ニ命シ埋葬ノ手續ヲ爲サシメ觀屬某ニ何  
時執行處分全ク畢ル因テ其始末ヲ録シ署名捺印スル者也

年 月 日

醫 官 氏 名 印

理 事 氏 名 印

錄 事 氏 名 印

第三十號

死刑揭示

本管、、、、、、、、、

第一號書  
式ニ全シ

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年 齡

宣告全文ヲ揭ク、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

右之通宣告候ニ付公告スル者也  
年 月 日  
某鎮臺(營所)軍法會議  
第三十一號

人 相 書

本管、、、、、、、、、

第一號書  
式ニ同シ

兵種隊號(所管)

氏 名

年 齡

丈 顔 色





第三條 鎮守府司令官艦隊司令官若クハ東京軍法會議判士長陸軍法軍會議若クハ普通裁判所ニ於テ開ク審問ニ付キ會同ヲ要スル者ト認ムル時ハ其意見書ヲ海軍大臣ニ具申ス可シ

第四條 會同官ハ鎮守府司令官艦隊司令官若クハ東京軍法會議判士長其部下ノ將校ニ之ヲ命スルコトヲ得若シ部外ノ者ヲ要スル時ハ海軍大臣ニ申請ス可シ

第五條 會同官ハ豫審ニ會同スルモノトス

第六條 會同官訊問上必要ト認ムル事項ハ法庭外ニ於テ審豫判事理事ニ對シ訊問ヲ要求スルコトヲ得

第七條 會同官ハ審判ノ景況及雙方人心ノ關係等詳細ニ記錄シ鎮守府司令官艦隊司令官若クハ東京軍法會議判士長ニ具申シ鎮守府司令官艦隊司令官若クハ東京軍法會議判士長ハ之ヲ海軍大臣ニ具申ス可シ

●第三章 軍人軍屬

○第一節 軍人軍屬治罪手續

十五年十月司法省號外達

軍人軍屬治罪手續ノ儀別紙ノ通太政官ヘ伺候處朱書ノ如ク御裁令相

成候條此旨爲心得及内訓候也

但徵兵徵集ノ期ニ後レタル者モ右御裁令ニ據リ司法衙門ニ於テ審判ス可キ者トス

軍人軍屬治罪手續ノ儀ニ付テハ昨年十二月陸軍省伺ヘ御裁令ノ趣モ之アリ總テ舊慣ニ仍リ處分スヘキノ處軍人軍屬普通裁判所公廷内ノ輕罪違警罪ハ治罪法第二百七十三條ニ其身分ノ如何ニ拘ハラヌ云々ノ明文之アルニ付無論該條ニ依リ普通裁判所ニ於テ裁判ス可キ儀ニ之アルヘク將又當人ニテ陸軍刑法ヲ犯スモノアルハ右海軍省伺第二條ノ旨意ヲ指考スレハ無論陸軍裁判所ニテ裁判スヘキ儀ト相考候得共爲念一應相伺候也

(朱書)

伺之趣左之通可相心得事

明治十五年九月二十二日

前段伺之通後段陸軍治罪法制定迄當人ハ司法衙門ニ於テ審判スヘキモノトス

○第二節 陸軍裁判傍聽

明治十五年十月陸軍省達乙第六十六號陸軍一般達

鎮臺營所軍法會議ニ於テ末尾ノ糾彈(糾問辯論)及ヒ裁判宣告ノ節自  
今軍人軍屬ニ限リ傍聽差許候條此旨相達候事  
但裁判事件軍事ノ機密ニ關シ及ヒ公安若クハ風俗ヲ害スルノ恐  
レアル時ハ之ヲ禁スヘキ事

○第三節

軍人軍屬罪犯遠隔ノ  
地ニ送致費用償還方 明治十八年九月海軍  
省丙第四十七號達

海軍々々軍屬ノ罪犯ニシテ遠隔ノ地ニ送致スヘキ者アル時ハ自今警  
察署ヘ依頼シテ遞傳護送スヘシ其費用返辨方警視廳ヨリ請求スル節  
ハ艦隊ニ屬スルモノハ會計局ニ於テ艦船費ヲ以テ償還シ其他ハ同局  
ヨリ通知ニ依リ其裁判管轄ノ廳ヨリ直ニ償還スヘシ此旨相達候事

○第四節

軍人軍屬滿  
刑歸郷旅費 明治十六年十二月陸  
軍省達甲第四十二號

軍人軍屬ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ地方監獄署ニ交付ノ者滿刑  
ノ節歸郷旅費自今廢止候條此旨相達候事

○第五節

軍人軍屬違警罪處分例 十九年五月

朕陸軍軍人軍屬違警罪處分例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
御名 御璽

勅令第四十四號

陸軍軍人軍屬違警罪處分例

第一條 陸軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ違警罪即決例ニ依リ憲兵  
部ニ於テ其處分ヲ爲シ憲兵設置ナキ地ニ於テハ警察署ニ於テ其處  
分ヲ爲ス可シ

第二條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ被告人ヲ留置シタルトモハ直チ  
ニ其所屬ノ長官若クハ隊長ニ通知ス可シ

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ軍法會議ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコ  
トヲ得其裁判管轄ハ陸軍治罪法ニ從フ

第四條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ違警罪即決例第五條ニ記載シタ  
ル期限内更ニ其理由ヲ記シタル書面ヲ即決ノ言渡ヲ爲シタル憲兵  
部若クハ警察署ニ差出スヘシ

第五條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ前條ノ書面ヲ受領シタルトモハ  
二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ管轄軍法會議ノ所管司令  
官ニ送致ス可シ

第六條 軍法會議ニ於テ被告人ノ訊問ヲ要セザルモノハ認ルトモハ  
書面ニ依リ其裁判ヲ爲スコトヲ得



第七條 即決ノ言渡確定シ若クハ正式裁判ノ言渡ヲ爲シタルトキハ  
憲兵部警察署軍法會議ヨリ被告人所屬ノ長官若クハ隊長ニ其執行  
ヲ囑託スルコトヲ得

第八條 軍法會議ノ裁判ニ對シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

●第四章

○第一節 海軍治罪法

十七年三月  
第八號布告

海軍治罪法目錄

第一章 總則	自第一條
第二章 軍法會議ノ構成	至第六條
第三章 軍法會議ノ權限	自第七條
第四章 海軍檢察	至第十二條
第五章 審問	自第十三條
第六章 判決	至第二十三條
第七章 軍中處分	自第二十四條
海軍治罪法	至第三十五條
第一章 總則	自第五十六條
	至第七十八條
	自第七十九條
	至第八十四條

第一條 海軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セズ

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サズ但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限り之  
ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ海軍刑法第五十條第五十一條ニ掲クル者ヲ  
謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦隊司令官  
及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百  
條第百一條ノ規則ハ其治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判  
ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第七條 軍法會議ヲ別テ四ト爲ス

一東京軍法會議。二鎮守府軍法會議。三艦隊軍法會議。四合圍軍法  
會議東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ハ常設ト爲シ艦隊軍法會議  
ハ臨時艦内ニ之ヲ設ケ合圍軍法會議ハ合圍間之ヲ設ケ

第八條 軍法會議ハ判士長一名判士四名主理録事各一名若クハ數名ヲ以之ヲ開ク

判士長ハ佐官ヲ以テ判士ハ尉官主理ハ奏任官録事ハ七等官以下ヲ以テス若シ被告人陸海軍中尉以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

一被告人陸海軍少將以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ勅任官ノ主理ヲシテ其職ヲ掌ラシム

判士長	判士	被告人
佐官 二名	大尉二名若クハ中尉二名若クハ少尉二名若クハ	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐若クハ中佐 一名	大尉二名若クハ中尉二名若クハ少尉二名若クハ	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐 一名	中佐二名若クハ少佐二名若クハ	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
少將 一名	大佐二名若クハ中佐二名若クハ少佐二名若クハ	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將 一名	少將二名若クハ大佐二名若クハ中佐二名若クハ	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將 一名	中將二名若クハ少將二名若クハ	陸海軍少將及ヒ同等ノ軍人軍屬

大將 一名	中將三名若クハ少將一名若クハ	陸海軍中將及ヒ同等ノ軍屬
大將 一名	大將一名	陸海軍大將及ヒ同等ノ軍屬

第九條 軍人ニ非サル勅任官ヲ審判スル時ノ軍法會議ハ將官ヲ審判スルノ例ニ從フ

第十條 外國又ハ戰地ヘ數隻ノ艦船ヲ差遣スル時ハ海軍卿ヨリ其先任艦長ニ艦隊軍法會議ヲ開クノ權ヲ付與スルコトアル可シ此場合ニ於テハ此權限司令官ニ同シ

第十一條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ海軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス勅任官ニ主理ヲ命スル時モ亦同シ

佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲シ奏任官ヲ以テ主理若クハ録事ト爲ス時東京鎮守府ニ於テハ海軍卿之ヲ命シ艦内ニ於テハ司令官之ヲ命ス可シ但檢察官若クハ審問委員アリシ者ハ其事件ノ判士ニ加フルコトナシ

第十二條 艦隊軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺乏スル時ハ司令官ノ上申ニ依リ海軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム但外國ニ在テハ司令

官他ノ官吏ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 東京軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セサル軍人其他  
海軍ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者。二 鎮守府軍  
法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セス海軍刑法第三條第四條  
ニ依リ處斷ス可キ者。三 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權  
限ニ屬セサル海軍監獄ニ在ル未決既決ノ囚人ノ重罪輕罪ヲ犯シタ  
ル者

第十四條 鎮守府軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 鎮守府長官ノ麾下ニ屬スル軍人其他鎮守府ノ用ニ供スル船舶ノ  
乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者。二 鎮守府ノ所管ニ係リ海軍刑法第三  
條第四條ニ依リ處斷ス可キ者。三 鎮守府所管ノ監獄ニ在ル未決既  
決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十五條 艦隊軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 司令官ノ麾下ニ屬スル軍人其他從軍諸員及ヒ艦隊ノ用ニ供スル  
船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者。二 司令官ノ所管ニ係リ海軍刑

法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者。三 艦船内ニ在ル未決既決ノ  
囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十六條 艦隊若クハ數隻ノ艦船外國へ出發シ後其軍法會議ノ權限  
ニ屬スル者内國ニ在テ犯罪發覺シタル時ハ鎮守府軍法會議ニ於テ  
之ヲ審判ス可シ

第十七條 海軍卿ハ時宜ニ依リ甲軍法會議ノ權限ニ屬スル事件ヲ乙  
軍法會議ニ移シ其審判ヲ爲サシムルコトヲ得

第十八條 軍人任官若クハ就役前罪ヲ犯シ在官現役中發覺シタル者  
ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免  
役ノ後發覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス

歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺  
シタル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發  
覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時  
ハ先キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍  
法會議ニ於テ之ヲ審判ス但陸軍々人軍屬ト共犯ニ係ル時ハ第十九

條ノ例ニ從フ

第二十一條 海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十三條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第四章 海軍檢察

第二十四條 海軍檢察ハ海軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ証憑ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スルモノハ所管長官若クハ所屬長ノ命令ヲ受ケテ海軍檢察ノ職務ヲ行フ

東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ノ主理。鎮守府及艦船營ノ士官。學校監事

第二十六條 海軍檢察ノ職務ヲ行フ者現行犯アルコトヲ知リタル時ハ時宜ニ因リ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ルコトヲ得

第二十七條 各廳長及ヒ艦船營長ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ海軍檢察ノ處分ヲ爲シ又ハ第二十五條ニ記載シタル諸官ニ命シ若クハ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ被告ノ所屬長東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十九條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知タル時ハ第二十八條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第三十條 軍人其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪ヲ犯タル者アルコトヲ知タル時ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ被告ノ所屬長ニ告發ス可シ

第三十一條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理司法警察官憲兵若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十二條 司法警察官憲兵及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ

其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議  
若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ引致ス可シ

第三十三條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ被  
告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ交  
付ス可シ

第三十四條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更セシコ  
トヲ請求スルコトヲ得

第三十五條 第二十五條ニ記載シタル諸官海軍檢察ノ處分ヲ爲シタ  
ル時ハ調書ヲ作り証據文書ヲ添テ各其所管長官若クハ所屬長又ハ  
委託ヲ受ケタル各廳長ニ具申ス可シ

第五章 審問

第三十六條 鎮守府長官司令官被告事件ノ具申ヲ受タル時ハ速ニ左  
ノ處分ヲ爲ス可シ

被告人上長官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申  
ス可シ

被告人士官以下及ヒ同等以下ノ軍人若クハ其他ノ諸人ナル時ハ其  
事件ノ難易ニ從ヒ鎮守府長官ハ判士ニ司令官ハ麾下ノ將校ニ審問

委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ判決ニ附スヘシ

第三十七條 各廳長被告事件ノ具申ヲ受ケ若クハ自ラ檢察ノ處分ヲ  
爲シタル時ハ速ニ其事件ヲ東京軍法會議ノ主理ニ移シ主理ハ之ヲ  
判士長ニ交付ス可シ

第三十八條 東京軍法會議ハ判士長主理ヨリ被告事件ノ交付ヲ受ケ  
タル時ハ速ニ左ノ處分ヲ爲ス可シ  
被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申  
ス可シ

被告人下士以下及ヒ同等以下ノ軍人若クハ其他ノ諸人ナル時ハ其  
事件ノ難易ニ從ヒ判士ニ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ  
直ニ判決ニ付ス可シ

第三十九條 海軍卿被告事件ノ具申ヲ受タル時ハ其事件ノ難易ニ從  
ヒ審問若クハ判決ニ付スルノ命令ヲ下ス可シ其命令ヲ受タル鎮守  
府長官司令官若クハ判事長ハ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ又ハ  
直ニ判決ニ付ス可シ

第四十條 審問委員審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷  
シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十一條 審問委員ハ召喚狀ヲ受クヘキ被告人遠隔ノ地ニ在ル時  
 ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十二條 審問委員ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十三條 審問委員ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走スルノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第四十四條 審問委員ハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ委シテ之ヲ執行スルコトヲ得

第四十五條 審問委員ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十六條 審問委員ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ハ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

司令官外國ニ在テハ領事若クハ公使ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

第四十七條 審問委員ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ラズ又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十八條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ録事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得

其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十八條第二項ノ例ニ依ル

第五十條 審問委員ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ其所在ニ就テ陳述ヲ聽クヘシ

證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

證人遠隔ノ地ニ住スル時ハ第四十八條第三項ノ例ニ依ル

第五十一條 審問委員ハ被告人及ヒ證人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄收シ被告人若クハ證人ニ讀出セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

被告人及ヒ證人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルコトヲ得  
第五十二條 審問委員ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ  
鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ署名捺印ス可シ

第五十三條 審問委員ハ證人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシメテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但其證人ニ對シテ勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
證人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定

ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十四條 證人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時ハ亦審問委員之ヲ命ス

第五十五條 審問委員ハ審問ニ於テ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ

共犯ヲ覺舉シタル時ハ之ヲ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

第五十六條 審問委員ハ審問終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添ヘ訴訟文書ト共ニ之ヲ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

第六章 判決

第五十七條 鎮守府長官若クハ司令官審問事件ノ具申ヲ受ケ被告人上長官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

東京軍法會議ノ判士長審問事件ノ具申ヲ受ケ被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

東京軍法會議ノ判士長審問事件ノ具申ヲ受ケ被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

第五十八條 海軍卿審問事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下ス可シ

第五十九條 鎮守府長官若クハ司令官軍法會議ヲ開ク時ハ其命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ主理ニ下付シ主理ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

東京軍法會議ノ判士長軍法會議ヲ開ク時ハ之ヲ主理ニ通知シ主理ハ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第六十條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士主理錄事各其席ニ就キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等職名氏名族籍年齢住所ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告テ録事ヲシテ審問委員ノ報告書ヲ朗讀セシム其朗讀終リタルノ後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第六十一條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處

分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第六十二條 判士長ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應

セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病其他正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ

出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲ス可シ

第六十四條 被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セズ又ハ召喚狀ヲ送

達スルコトヲ得サル時ハ關席裁判ヲ爲ス可シ

第六十五條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時被告人中關席シタル者アリト

雖出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十六條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判

士ニ命シテ訊問セシム可シ

第六十七條 判士長ハ證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ

刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若ク

ハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會

議ノ判士長ハ各其所管長官ニ具申シ東京軍法會議ノ判士長ハ其證



人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ海軍卿ニ具申ス可シ  
 其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得  
 第六十八條 判士長ハ法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時  
 ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ  
 法廷ニ於テ共犯ヲ覺舉シタル時ハ第六十七條ノ例ニ從ヒ具申スベシ  
 若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ  
 第六十九條 判士長ハ被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ更ニ被告  
 人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ審問終リタルノ旨ヲ  
 告ケ被告入ヲ退廷セシム可シ  
 第七十條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シ之ヲ作  
 リ判士長判士録事署名捺印ス可シ  
 一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ  
 記ス  
 二無罪ノ判決書ニハ被告事件罪トナラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ  
 犯罪ノ證憑備ハタサル時ハ其旨ヲ記ス  
 三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタル  
 コト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四被告人ノ官位勳等職名氏名族籍年齢住所及ヒ軍法會議判決ノ年  
 月日ヲ記ス

第七十一條 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ判士長ハ判決書  
 ニ訴訟文書ヲ添ヘ各其所管長官ニ具申ス可シ

第七十二條 鎮守府長官司令官ハ左ニ記載スル事件ハ海軍卿ニ上申  
 シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス

死刑。上長官及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪。軍官准士官及ヒ同等軍  
 人ノ重罪

第七十三條 東京軍法會議ノ判士長ハ判決書ニ訴訟文書ヲ添ヘ海軍  
 卿ニ上申シテ命ヲ請フヘシ

第七十四條 鎮守府長官司令官ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ其  
 專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ海軍卿ニ上申ス可シ

第七十五條 海軍卿ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ其具申ス  
 ル所ノ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下シテ之  
 ヲ再議セシムルコトヲ得

海軍卿ハ死刑並ニ上長官以上及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪並士官

及ヒ同等奏任官軍人ノ重罪ニ係ルモノハ上奏シテ命ヲ請フ可シ  
第七十六條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士主理録事法廷  
ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十七條 外國若クハ航海中ニ於テ司令官又ハ艦長ハ輕罪ノ刑ノ  
宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數  
ハ刑期ニ算入セス

第七十八條 行刑ニ關スル方法ハ海軍卿別ニ之ヲ定ム  
第七章 軍中處分

第七十九條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官麾下ノ將校若ク  
ハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハ  
ラス之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之  
ニ充ツルコトヲ得

第八十條 合圍ノ地ニ於テハ第十三條第十四條第十五條ニ記載シタ  
ル者ハ合圍軍法會議ノ權限ニ屬ス

第八十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官被告人ノ官等ニ  
拘ハラス直ニ審判及ヒ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得

第八十二條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官又ハ艦長ハ輕罪

ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戰罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務  
ノ日數ハ刑期ニ算入セス其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ  
減免スルコトヲ得

第八十三條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官時宜ニ因リ此治  
罪法ノ條目ヲ省畧處分セシムルコトヲ得

第八十四條 合圍軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者  
ハ海軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送  
致ス可シ

○第二節 罪犯取扱及  
行刑手續

十七年四月海軍省  
丙第六十五號達

判士長判士審問委員若クハ海軍治罪法第二十五條ニ記載シタル諸官  
其職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ艦船艦長若クハ憲兵隊長ニ照會シ  
テ兵員ヲ要求使用スルコトヲ得

證人鑑定人通事旅費日當止宿料ヲ請求スル時ハ普通刑法附則第四十  
八條ニ從ヒ支給ス可シ

罰金科料ノ宣告ヲ爲ス時ハ其宣告ト共ニ限内納完セサル時ハ輕禁錮  
拘留ニ換フ可キコトヲ告示シ且ツ之ヲ其宣告書記ニ載シ置ク可シ

軍法會議ハ私訴ヲ受理セスト雖正贓物軍人軍屬ノ手ニ現存スルハ  
 追徴シテ其主ニ還付ス可シ  
 死刑ヲ執行ヲ爲ス時ハ主理録事司獄官囚人ヲ艦船ニ収禁シタル時ハ本艦ノ尉官醫官刑場ニ  
 立會ヒ司獄官尉官若クハヨリ囚人ニ死刑ヲ執行ス可キヲ告示シタル  
 後銃手ヲシテ之ヲ射殺セシム  
 銃手ハ水兵十二名ヲ撰ヒ尉官一名之ヲ指揮ス可シ囚人ハ其目ヲ蔽ヒ  
 柱ニ背テ坐セシメ紐ヲ以テ繫縛ス  
 銃手ハ六人ヲ前列トシ六人ヲ後列トシ囚人ヲ距ル十歩ノ地ニ於テ前  
 列ヲシテ囚人ノ眉間ヲ狙ヒ一聲ニ發射シテ之ヲ撃タシム若シ死ニ至  
 ラサル時ハ後列ヲシテ同シク之ヲ撃タシム  
 刑場ハ水兵若クハ憲兵ヲシテ警戒ヲ爲サシメ執行ニ關スル者ハ外入  
 ルヲ許サス但主理ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス  
 警戒ノ兵員ハ主理ノ請求ニ因リ艦船營長若クハ憲兵隊長之レ出ス可  
 シ  
 死刑ノ遺骸ハ便宜ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ之ヲ下  
 付ス可シ  
 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

主刑ヲ免シテ止メ監視ニ付シタル者ハ宣告書ノ謄本ト共ニ主理ヨリ  
 地方警察署ニ送致ス可シ

罰金科料ノ限内納完セサル者ハ主理其裁判宣告書ニ依テ直チニ之ヲ  
 輕禁錮拘留ニ換ヘ監獄署長ニ艦船ニ在テハ艦船長通知シテ其執行ヲ爲ス可シ但  
 艦内ニ於テ主理在ラサル時ハ艦船長部下ノ將校ニ命シテ處分ヲ爲サ  
 シム可シ

罰金科料ノ宣告ヲ受ケタル者納完セサル前ニ死去シタル時ハ之ヲ  
 徴收セズ

監視及ヒ特別監視ニ付スル者海軍ノ名籍ヲ除カレサル間ハ別ニ監視  
 法ヲ用フルニハ及ハス

假出獄ヲ許サレタル者艦船營ニ在ルハ其艦船營長ヨリ戴罪服務ヲ  
 命スルヲ得

帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止シタル者及ヒ褒章條例第四條ニ依リ褒章ヲ沒收シタル者ハ其裁判宣告書ノ謄本ヲ以テ主理ヨリ鎮守府長官艦隊司令若クハ東京軍法會議判士長ヲ經由シテ本省へ届出ツ可シ

但剝奪公權褒章沒收ノ者ハ主理其勳記勳章年金票褒章等ヲ収奪シ本省へ差出ス可シ

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判宣告ヲ爲スマテニ所有主ヲ發見セサル時ハ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ宣告ヲ爲ス可シト雖右ノ物件ハ榜示又ハ新聞紙其他適宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告シ一年間ニ所有主ヲ發見シタル時ハ主理直チニ之ヲ還付ス可シ若シ主理ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付キ費用ヲ要ス可キ者ト思料シタル時ハ之ヲ公賣シ其代價ヲ保存ス可シ但艦内ニ於テ主理在ラサル時ハ艦船長部下ノ將校ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テ前項ノ處分ヲ爲スヲ能ハサル時ハ直ニ之ヲ沒收スルコトヲ得但艦船内ニ於テモ亦本項ノ例ニ依ルコトヲ得  
明治十八年九月海軍省丙第四十七號達  
海軍々々軍屬ノ罪犯ニシテ遠隔ノ地ニ送致スヘキ者アルハ自今警

察署へ依頼シテ遞傳護送スヘシ其費用返辨方警視廳又ハ地方廳ヨリ請求スル節ハ艦隊ニ屬スルモノハ會計局ニ於テ艦船費ヲ以テ償還シ其他ハ同局ヨリノ通知ニ依リ其裁判管轄ノ廳ヨリ直ニ償還スヘシ此旨相達候事

○明治十九年二月内閣第五號布告

明治十七年三月第八號布告海軍治罪法第七條中東京軍法會議ハ當分ノ内之ヲ閉鎖シ該會議ノ權限ニ屬スル事件ハ鎮守府軍法會議ノ審判ニ付ス

奉 勅

●第五章 軍法會議

○第一節 海軍東京軍法會議

十七年四月海軍省丙第六十三號達

海軍東京軍法會議并ニ海軍東京監獄署ヲ設置シ其條例左ノ通相定ム此旨相達候事

海軍東京軍法會議條例

第一條 海軍東京軍法會議ハ海軍治罪法ニ從ヒ其權限ニ屬スル重罪輕罪ヲ審スル所トス

明治十七年  
四月海軍省  
丙第六十三  
號達海軍東  
京監獄署ヲ  
廢ス  
十九號  
達ヲ以  
テ消ル

- 第二條 軍法會議ニハ判士長判士主理録事ヲ置ク
- 第三條 軍法會議ノ下ニ庶務課ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製其他裁判上ノ事項ニ屬セサル庶務ヲ掌理ス
- 第四條 判士長一名佐官ヲ以テ之ニ補シ部下諸員ヲ統督シ主官百級ノ事務ヲ總理ス
- 第五條 判士長ハ主官ノ事務ニ於テハ卿ニ對シ其當否ヲ辨明スルヲ得而シテ亦擔保ノ責ニ任ス
- 第六條 判士長ハ海軍治罪法ニ係ル事務ニ付テハ直ニ之ヲ海軍監獄署長ニ達スルヲ得
- 第七條 判士長ハ部下諸員ノ進退黜陟ヲ卿ニ具狀スルヲ得
- 第八條 判士長ハ左ニ記列スル事項ハ卿ノ認可ヲ經ルニ非サレハ施行スルヲ得ス
  - 一 外國人ニ係ル訴訟ヲ取扱フ事
  - 二 定例外ノ經費金ヲ要スル事
  - 三 内外國人ト諸條約書ヲ交換スル事
  - 四 一工事ニ付百圓以上ノ金額ヲ要スル事

- 五 損廢ノ物品器具等ヲ賣却スル事
- 第九條 判士長ハ左ニ記列スル事項ハ之ヲ專行スルヲ得
  - 一 處務内規ヲ創設改良スル事
  - 二 給料一月金十圓以下若クハ日給金五十錢以下ノ備員ヲ進退黜陟スル事
  - 三 所轄諸員ニ分課ヲ命シ及ヒ之ヲ二十里以内ノ地ニ派出セシムル事
  - 四 課務ヲ分テ掛ヲ置ク事
  - 五 主管ノ事務ニ付各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スル事
- 第十條 判士六名尉官ヲ以テ之ニ補シ公判ノ事ヲ掌リ又判士長ノ命ヲ受ケ審問委員ト爲リ豫審ノ事ヲ掌ル
- 第十一條 審問委員ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ行フニ付テハ各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルヲ得
- 第十二條 録事四名七等官以下ヲ以テ之ニ充テ判士長判士ノ命ヲ受ケ豫審公判ノ調書其他審判ニ關スル文書ヲ作り及ヒ其事務ヲ理シ並ニ裁判ニ關スル書類ヲ保存スルヲ掌ル
- 第十三條 主理二名奏任官ヲ以テ之ヲ充テ告訴告發ヲ受ケ犯罪ノ搜

查起訴或ハ現行犯罪ニ係ル處分ヲ爲シ及ヒ裁判宣告ノ執行ノ事ヲ掌ル

第十四條 主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ行フニ付テハ各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルヲ得

第十五條 主理ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ事件表ヲ作り判士長ヲ經由シテ之ヲ卿ニ差出スヘシ

第十六條 主理ノ下ニ屬僚三名ヲ置キ判任官ヲ以テ之ニ充テ主理ノ命ヲ受ケ其事務ヲ掌理ス

第十七條 庶務課ニ課僚二名ヲ置キ其主務ニ從事セシメ又警査四名ヲ置キ警吏或ハ判任以上ノ官吏ヲ以テ之ニ充テ令狀ノ執行被告人ノ看守護送及ヒ公廷ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム

海軍東京軍法會議定員表

判士長	判士	判士	判士	判士	判士	判士	判士	判士	判士
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8
1	6	4	2	8	8	8	8	8	8

屬僚	八等官以下	三	八
警査	警吏同補	四	八
警査	外吏	四	八

○十七年七月海軍省丙第百十六號達

本年(四月)丙第六十三號達海軍東京軍法會議條例中左ノ通加除改正ス此旨相達候事

第三條第六條第十七條ヲ削リ第四條ヲ第三條ニ第五條ヲ第四條ニ第七條ヲ第五條ニ第八條ヲ第六條ニ第九條ヲ第七條ニ改メ而シテ左ノ一條ヲ加ヘ以下各條順次繰上ク

第八條 判士長ノ下ニ屬僚二名ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製及ヒ其他ノ庶務ヲ掌理セシメ又警査四名ヲ置キ警吏或ハ警吏補ヲ以テ之ニ充ツ判士長判守或ハ主理ノ命ヲ受ケ令狀ノ執行被告人ノ看守護送公廷ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム

第七條第三項中(分課)ヲ(掛)ニ改メ第四項ヲ削除シ次項ノ(五)ヲ(四)ニ改正第十二條中(宣告)ノ三字削除

○第二節

鎮守府軍法會議  
附同監獄署條例

十七年四月海軍省  
丙第六十四號

東海鎮守府刑事課監囚課ヲ廢シ同府ニ鎮守府軍法會議並ニ鎮守府監獄署ヲ設置シ其條例左ノ通相定ム此旨相達候事

鎮守府軍法會議條例  
第一條 鎮守府軍法會議ハ鎮守府長官ノ命ヲ受ケ其權限ニ屬スル重罪輕罪ヲ審判スル所トス

第二條 軍法會議ニハ判士長判士主理錄事ヲ置ク

第三條 軍法會議ノ下ニ庶務課ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製其他裁判上ノ事項ニ屬セサル庶務ヲ掌理ス

第四條 判士長一名佐官ヲ以テ之ニ補シ部下諸員ヲ統督シ主管百般ノ事務ヲ總理ス

第五條 判士長ハ主管ノ事務ニ於テハ鎮守府長官ニ對シ其當否ヲ辨明スルコトヲ得而シテ亦擔保ノ責ニ任ス

第六條 判士長ハ海軍治罪法ニ係ル事務ニ付テハ直ニ之ヲ海軍監獄署長ニ達スルコトヲ得

第七條 判士長ハ部下諸員ノ進退黜陟ヲ鎮守府長官ニ具狀スルコトヲ得

第八條 判士長ハ所轄諸員ニ分課ヲ命シ及ヒ之ヲ二十里以内ノ地ニ派出セシムルコトヲ得

第九條 判士長ハ課務ヲ分テ掛ヲ置クコトヲ得

第十條 判士長ハ主管ノ事務ニ付各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルコトヲ得

第十一條 判士若干名尉官ヲ以テ之ニ補シ公判ノ事ヲ掌リ又鎮守府長官ノ命ヲ受ケ審問委員ト爲リ豫審ノ事ヲ掌ル

第十二條 審問委員ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ行フニ付テハ各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルコトヲ得

第十三條 錄事若干名七等官以下ヲ以テ之ニ充テ判士長判士ノ命ヲ受ケ豫審公判ノ調書其他審判ニ關スル文書ヲ作り及ヒ其事務ヲ理シ并ニ裁判ニ關スル書類ヲ保存スルコトヲ掌ル

第十四條 主理若干名委任官ヲ以テ之ニ充テ告訴告發ヲ受ケ犯罪ノ搜查起訴或ハ現行犯罪ニ係ル處分ヲ爲シ裁判宣告ノ執行ノ事ヲ掌ル

第十五條 主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ行フニ付テハ各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルコトヲ得

第十六條 主理ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ事件表ヲ作り判士長ヲ經由シテ之ヲ鎮守府長官ニ差出ス可シ

第十七條 主理ノ下ニ屬僚若干名ヲ置キ判任官ヲ以テ之ニ充テ主吏ノ命ヲ受ケ其事務ヲ掌理ス

第十八條 庶務課ニ課僚若干名ヲ置キ其主務ニ從事セシメ又警査若干名ヲ置キ警吏或ハ判任以下ノ官吏ヲ以テ之ニ充テ令狀ノ執行被告人ノ看守護送及ヒ公庭ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム

○明治十七年海軍省丙第百十七號達

本年(四月)丙第六十四號達鎮守府軍法會議條例中左ノ通加除改正ス此旨相達候事

第三條第六條第九條第十八條ヲ削リ第四條ヲ第三條ニ第五條ヲ第四條ニ第七條ヲ第五條ニ第八條ヲ第六條ニ第十條ヲ第七條ニ改メ而シテ左ノ一條ヲ加ヘ以下各條順次繰上ク

第八條 判士長ノ下ニ屬僚若干名ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製及ヒ其他ノ庶務ヲ掌理セシメ又警査若干名ヲ置キ警吏或ハ警吏補ヲ以テ之ニ充テ判士長判士或ハ主理ノ命ヲ受ケ令狀ノ執行被告人ノ看守護送

公庭ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム

第六條中(分課)ヲ(掛)ニ改正

第十二條中(宣告)ノ三字ヲ削除

○第三節

鎮守府監獄署條例

十七年四月海軍省丙第六十四號達

鎮守府監獄署條例

第一條 鎮守府監獄署ハ鎮守府所屬ノ監獄ヲ管轄シ其事務ヲ掌理スル所トス

第二條 署内ニ庶務課ヲ置キ署長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守署内公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製及ヒ他ノ主管ニ屬セサル庶務ヲ掌理ス

第三條 署長一名少佐若クハ大尉ヲ以テ之ニ補シ所轄諸員ヲ統督シ主管ノ事務ヲ總理ス

第四條 署長ハ主管ノ事務ニ於テハ鎮守府長官ニ對シ其當否ヲ辨明スルコトヲ得而シテ亦擔保ノ責ニ任ス

第五條 署長ハ海軍治罪法ニ係ル事務ニ付判士長審問委員主理ヨリ



照會アルルハ速ニ其處分ヲ爲ス可シ

第六條 署長ハ所轄諸員ノ進退黜陟ヲ鎮守府長官ニ具狀スルヲ得

第七條 署長ハ監房ニ入ル、物品ハ一々之ヲ檢査シ其危險ノ虞アル者ハ之ヲ禁ス可シ

第八條 署長ハ不時ニ監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ査閲シ又警查長及ヒ警査ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録セシメ賞罰ヲ行フノ考據ト爲ス可シ

第九條 署長ハ所轄諸員ニ分課ヲ命ジ及ヒ之ヲ二十里以内ノ地ニ派出シムルヲ得

第十條 署長ハ課務ヲ分テ掛ヲ置クヲ得

第十一條 署長ハ主管ノ事務ニ付各廳ニ對シ其名ヲ署シ照會往復スルヲ得

第十二條 警査長若干名尉官ヲ以テ之ニ補シ監獄ノ巡視警戒出入物件ノ調査出入監人ノ點檢在監人ノ看守護送驅役等ヲ監督シ及ヒ在監人ノ名籍ヲ調査スル事ヲ掌リ署長事故アルルハ先任ノ警査長其代理ヲ爲ス

第十三條 警査若干名警吏ヲ以テ之ニ充テ警査長ノ命ヲ受ケ監獄ノ

巡視警戒出入物件ノ調査出入監人ノ點檢在監人ノ看守護送驅役等ノ事ヲ掌ル

第十四條 署内ニ軍醫若干名ヲ置キ醫務衛生ノ事ヲ掌ラシム又其下ニ看護手看病夫若干名ヲ附屬ス

第十五條 軍醫ハ死刑ノ執行アルルハ之ニ立會フ可シ

第十六條 庶務課ニ課僚若干名ヲ置キ署長ノ命ヲ受ケ其主務ニ從事セシム

○第四節

軍法會議ノ言渡ニ對シ上告ノ件

十八年十月海軍省丙第五十七號達

本年十二號布告第四條ニ依リ軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スル時ハ主理其辨明書ヲ作り訴訟書類ヲ添へ所管長官ヲ經テ大審院ニ送致スル儀ト可心得此旨相達候事

第四類 [陸海軍監獄則]

●第一章

○第一節 陸軍監獄則

十六年十月陸軍省乙第九號達

陸軍監獄則目錄

第一章	總則
第二章	監署ノ規程
第三章	監獄ノ構造
第四章	役法及ヒ工錢
第五章	通信接見
第六章	賞譽
第七章	懲罰

陸軍監獄則

第一章 總則

第一條 陸軍監獄ヲ別テ左ノ三種ト爲ス  
 一 監倉 未決者ヲ拘禁スル所トス  
 二 禁錮場 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス  
 三 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス  
 又各兵營内及ヒ憲兵部ニ留置場ヲ置キ未決者ヲ一時留置スル所トス但時宜ニ依リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得  
 第二條 監獄ハ軍法會議所在ノ地ニ置キ鎮臺ニ在テハ軍管司令官營

所ニ在テハ營所司令官ニ屬ス

第三條 監獄ハ會計一等軍吏ヲ以テ監獄長トシ會計二三等軍吏ヲ以

テ監獄副長トシ會計書記ヲ以テ看守長及ヒ書記トシ會計卒ヲ以テ看守トシ其他二三等軍醫看護長看病卒及ヒ押丁ヲ置ク

第四條 軍管司令官及ヒ營所司令官ハ臨時監獄ヲ巡閱スヘシ  
理事及ヒ審事モ亦臨時監倉ヲ巡閱スヘシ

第五條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者ヲ謂フ

第六條 十六歳未満六十歳以上ノ者及ヒ婦女ヲ入監スルコトアル時ハ普通監獄則ノ例ニ照シテ之ヲ區別スヘシ

第二章 監署ノ規程

第七條 在監人ハ左ノ區別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

但已決囚ハ各刑名ニ從ヒ仍ホ其監房ヲ別異スヘシ

一 准士官以上及ヒ同等ノ軍屬

二 下士及ヒ同等ノ軍屬

三 諸卒諸生徒等外以下ノ軍屬

第八條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ傳告者誘工者ト爲ス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシ

ム但シ傳告者誘工者ハ滿六月以上之ヲ繼續セシムルコトヲ得ス傳告者誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スル所爲アルヲ許サス  
第九條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過クヘカラス

第十條 死刑ニ處セラレタル者若クハ在監中死去スル者ノ所有ニ屬スル貨物ハ親屬若クハ故舊ニ下付スヘシ  
親屬故舊遠隔ノ地ニ在リ許多ノ遞送費ヲ要スル時ハ販賣シテ其代價ヲ送致スルコトヲ得遞送ノ費用ハ領收スル者之ヲ償フヘシ其貨物若クハ代價受クヘキ親屬故舊ナキトキハ之ヲ沒收ス

第十一條 在監人病死スル者アルトキ其遺骸ハ親屬若クハ故舊ノ請フ者ニ下付ス若シ請フ者ナキトキハ之ヲ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ但下士以下別ニ定ムル所ノ規則ニ依リ處分スヘキ者ハ其規則ニ從フヘシ

第十二條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ第十條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス  
營内居住ノ者ニ於テハ之ヲ本隊ニ送致スヘシ

第十三條 監獄ノ近傍ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ獄吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避ケシムヘシ  
水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ違ナキ時ハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルコトヲ得

第十四條 未決者ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服寢具若クハ飲食物ヲ贈ラント請フ時ハ之ヲ許シ酒類烟草其他攝生ニ害アル者ハ之ヲ許サス但書籍ハ内務省及ヒ操典若クハ修身營業ニ必用ナル者ニ限り飲食物ハ炊煮ヲ要セサル者ニシテ一人一食ノ量ニ限ルヘシ  
第十五條 已決者ニハ前條ニ掲グル書籍及ヒ用紙ノ外差入品ヲ許サス

第三章 監獄ノ構造

第十六條 監倉禁錮場一區域内ニ在ル者ハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫ス  
拘留場ハ禁錮場ノ監房ヲ分チテ之ニ充ツ

第十七條 病室ハ禁錮内ニ設ケ傳染病室ハ之ヲ區別ス  
閻室ハ禁錮場内ニ設ク其室ハ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

第十八條 甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼此交談シ又ハ

物件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ

第十九條 接見室ハ監獄内ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之レニ  
縱横ノ格子ヲ嵌メ在監人ハ格子内ニ立タシメ外人ハ格子外ノ柵欄  
ニ倚ラシム其柵欄ハ格子ヨリ三尺ヲ距ルヘシ

第四章 役法及ヒ工錢

第二十條 定役ニ服スル者ノ作業ハ毎囚一日ノ科程ヲ定メ服役セシ  
ム若シ病後ノ疲勞等ニ因リ勞作ニ堪ヘサル者ハ其体力ニ應シ科程  
ヲ寬恕ス

第二十一條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

父母ノ喪ニ遭フ者亦一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

十二月三十一日

第二十二條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始メテ各自ノ工  
錢ヲ科定シ之ヲ十分シテ其八分ヲ監署ニ收メ其二分ヲ與フ

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シ  
テ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒當日ノ科程  
ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢亦之ニ準ス

第二十三條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期  
一百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第二十四條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ  
其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第二十五條 各種ノ工錢ハ其他普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ  
應シテ之ヲ定ムヘシ

第二十六條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ヒニ由リ親屬ニ贈與スル

コヲ許シ又必用ノ物品及ヒ第十四條ノ書物若クハ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコヲ得

第二十七條 在監人死去スル時其領置ノ工錢ハ第十條ノ例ニ照シ處分スヘシ

第二十八條 在監人逃走スル時其領置ノ工錢已決囚ニ係ル者ハ之ヲ沒收スヘシ

未決者及ヒ定役ニ服セサル囚徒若クハ定役ニ服スル者ト雖用科程外ノ勞作ニ依リテ得タル工錢ハ親屬ニ下付シ親屬ナキ時ハ之ヲ沒收ス

營内居住ノ者ニ在テハ第十二條ノ例ニ照シテ處分ス可シ

第五章 通信接見

第二十九條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六月間ニ一次トシ一次一通ニ過ルコヲ得ス但官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ若クハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏必用ト認ル時ハ此限ニ在ラス

第三十條 未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但審事若クハ理事ノ閱檢ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルコヲ得ス

第三十一條 在監人ノ發スル信書ハ監獄長之ヲ閱檢スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アル時ハ通信スルコヲ許サス

第三十二條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來ル信書ハ監獄長之ヲ閱檢シ適正ノ事項ヲ陳ヘ若クハ遷善ノ諭示ヲ主トスル者ニ限り之ヲ本人ニ附與ス若シ書中忌諱ニ涉リ若クハ在監人ヲ改悛ヲ妨ル者ト認ルトキハ之ヲ附與スヘカラス親屬故舊ノ信書ハ監獄署ニ宛差出サシムヘシ

第三十三條 在監人ニ接見セント請フ者アル時ハ監獄長先ツ之ニ面接シテ族籍職業氏名等ヲ訊ヒ其緣由旨趣ヲ詳悉シ己ムヲ得サルノ事情アリテ形狀ノ疑フ可キノナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並蒞ンテ面會セシム但未決者ニ係ルハ監獄長之ヲ理事若クハ審事ニ照會シテ之ヲ許否スヘシ

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルコヲ得ス若シ最初陳述シタル面會ヲ請フノ旨趣ニ違ヒタル談話ヲ爲ス時ハ直チニ之ヲ停止ス

第三十四條 死刑執行ノ以前又ハ徒流禁獄ノ刑ヲ受ケタル囚徒ヲ集治監ニ押送スル以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フハ前條ノ規則ニ從ヒ面會セシム但其時間ハ五十分時ヲ過ルコヲ得ス

第六章 賞譽

第三十五條 已決囚獄則ヲ謹守シ且改悛ノ狀著キ者ト監獄長ニ於テ認ムル所ハ之ヲ賞譽スヘシ

第三十六條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ方二寸ノ藍色布ヲ縫着スヘシ

第三十七條 賞表ハ特赦ヲ具狀スルノ參考ト爲スコヲ得

第三十八條 賞表ヲ得タル者ニハ二月間ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルコヲ許ス

第三十九條 已決囚在監人ノ逃走ヲ密告若クハ捕獲シ或ハ監獄ニ罹ル火災ヲ防禦シ或ハ人命ヲ救援スル者アル所ハ金貳拾五錢以下ヲ賞與ス

其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請求アルトキハ必用品若クハ食物ヲ購ヒ之ヲ給スヘシ

第四十條 未決監ニ在ル者前條ノ勞働アル時ハ之ヲ録シテ軍法會議ノ參考ニ供ス可シ

第七章 懲罰

第四十一條 已決囚此獄則其他獄内若クハ服役ノ爲メニ設ル所ノ規則ヲ犯ス時ハ其輕重ヲ量リ左ノ罰例ニ從テ處分ス

一 絶信親屬故舊ト通信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房若クハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ尙ホ坐作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ニテ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

四 閤室 閤室ニ獨居セシメ常食ノ半若クハ其三分ニテ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ寢具ヲ禁ス

第四十二條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ七晝夜ヲ限リトス減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキ時ハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコヲ得

第四十三條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハズ或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ其他規則ヲ犯ス時ハ所犯ノ輕重ヲ量リ第四十一條ニ準擬シ減食スルコヲ得

第四十四條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タル時ハ賞表一個若クハ數個ヲ褫奪ス

第四十五條 減食若クハ閤食ノ罰ニ處ス可キ者アル時ハ醫官ヲシテ

診視セシメ身軀ニ妨ナキヲ証シテ後之ヲ行フヘシ  
第四十六條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀ヲ表スル時ハ之ヲ免ル  
スコトヲ得

○第二節

陸軍監獄署  
官員服務概則

十六年十月陸軍  
省乙第百十號達

第一條 新ニ入監スル者アル時ハ監獄長先ツ拘引狀收禁狀裁判宣告  
書等ノ文書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領收ノ証ヲ引致シ來ル者ニ交付  
ス其文書ナキ者ハ入監スヘカラス

其入監者ノ名籍ハ軍法會議ノ報知ヲ得テ書記ヲシテ其要項ヲ錄セ  
シム

第二條 監房ニ入ル、物品ハ監獄長之ヲ檢査シ其危險ノ虞アル者ハ  
之ヲ禁スヘシ

第三條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ監獄長之ヲ勸誘シ自ラ勞作セン  
ト請フニ至ラシムルコトヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ監獄長ノ指  
示ニ依ル

第四條 監獄長ハ不時ニ監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ查閱スヘシ  
第五條 監獄長ハ看守長及看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄セシメ

以テ賞罰ヲ行フノ參考ト爲スヘシ

賞罰ヲ行ヒタルトキハ第四十四條ノ例ニ依リ在監人ニ示スヘシ  
賞表ヲ與ヘタル時ハ賞簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ若シ褫奪シタ  
ル時ハ之ヲ刪除スヘシ

第六條 在監人滿刑ノ者アル時監獄長ハ其本人ノ所管ヘ其旨ヲ滿刑  
三日前ニ通報スヘシ

第七條 共犯ニ係ル未決者ハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ  
押送スル時亦同行セシムルコトヲ得ス但犯狀ニ依リ之ヲ別異セサル  
コトヲ得

第八條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル監倉ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス  
番號ヲ以テ之ニ換フヘシ其着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ番號ヲ墨書  
シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ共  
犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルコトヲ得サラシム

第九條 前二條ハ理事若クハ審事ノ報ヲ得テ監獄長其指揮ヲナスヘ  
シ

第十條 入監人ノ携有スル財物若クハ物品ハ看守長悉ク點檢シテ其  
名數ヲ簿冊ニ記載シ監獄長証印シテ之ヲ領置シ解放ノ時還附スヘ

但點檢ノ際隱匿スル貨物ハ之ヲ沒收ス  
 其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フ時  
 ハ之ヲ許ス未決者ニ係ルトキハ理事審事ニ照會シテ之ヲ行フ  
 第十一條 看守長ハ入監者ノ全身ヲ検査シ利器其他ノ物件ヲ夾帶ス  
 ルヲ拒クヘシ  
 第十二條 看守長ハ總テ在監人ノ姓名ヲ簿冊ニ記載シ之レニ番號ヲ  
 付シ監房ノ出入ヲ明瞭ニスヘシ  
 第十三條 看守長ハ日夜監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ査閱スヘシ  
 第十四條 看守長ハ毎日終役ノ際工業ノ諸器械ヲ牒簿ニ照シテ點檢  
 ス可シ  
 第十五條 看守長書記ハ月末毎ニ諸工業ニ關スル需用品ノ検査ヲ遂  
 ケ其費消高及殘餘等ヲ監獄長ニ申報ス可シ  
 第十六條 在監人ヲ軍法會議其他へ護送スル時看守長ハ監獄長ノ達  
 ヲ受ケ看守ヲシテ護送セシム若シ病囚アレハ醫官ノ診斷ニ依リ乘  
 車セシムルコトアリ  
 第十七條 在監人ヲ他監ニ移ス時ハ其名籍若クハ處刑ノ宣告其他必  
 用ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シ看守長ヲシテ其引渡ヲナサシム

第十八條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ  
 整列セシメ看守長及看守點檢ス可シ還房セシムル時亦同シ  
 第十九條 看守長ハ日々製造品ノ検査ヲナシ翌日ニ至リ其物品ヲ監  
 獄長ニ差出スヘシ  
 第二十條 看守長ハ被服寢具ノ欠乏アルトキハ監獄長ニ請求シ之ヲ  
 受取り囚徒ノ姓名及ヒ被服ノ番號ヲ牒簿ニ記載シテ貸與スヘシ  
 第二十一條 書記ハ日々潰漏ナク已決未決ノ名籍ヲ滿刑放免ノ期日  
 ヲ訓算シ報告書ヲ作り監獄長ニ差出スヘシ又記録ヲ明瞭ニシ文書  
 ノ錯雜ナカラシメンコトヲ要ス  
 第二十二條 書記ハ毎月囚徒ノ製造セル物品ノ數量價位等ヲ牒簿ニ  
 詳記シ監獄長ノ閱檢ヲ受クヘシ  
 第二十三條 看守ハ晝夜間斷ナク獄舎内外ヲ巡視シ破牢越獄等ノチ  
 カラシメンコトヲ要ス又獄則ニ違フ者アル時ハ其旨ヲ看守長ニ申告  
 スヘシ  
 第二十四條 在監人法廷ニ出ル時及運動入浴其他都テ獄舎ヲ出入ス  
 ル時ハ看守之ヲ監視シ毫モ怠慢スヘカラス  
 第二十五條 看守ハ工役ノ督責ニ任シ日々ノ製造高ヲ牒簿ニ記シ調



印シテ其物品ト共ニ看守長ノ檢印ヲ受クヘシ  
第二十六條 囚徒ノ製造品賣却代價ノ中ヨリ器械費及需用費等ヲ引去リ其利益金ハ毎月官納スヘシ

第二十七條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ司獄官吏之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ其陸軍監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム其自辨スル資力ナキ者ニハ之ヲ許サス

第二十八條 門ノ開閉ハ日出日没タルヘシ其鑰ハ宿直官吏之ヲ領置レ開門ノ時々門番ヘ授クヘシ

第二十九條 門ノ通行ハ陸軍ノ徽章アル者ノ外ハ姓名及其事由ヲ問ヒ之ヲ許ス已決未決監ノ門ハ陸軍徽章アル者ト雖モ監獄長ノ達ニ非サレハ通行セシムルコトヲ得ス

第三十條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰令ニ照シ處分スルノ外恣ニ責罰スルコトヲ得ス

第三十一條 在監人書籍ヲ看シト請フ者アルトキハ内務書及操典若クハ修身營業ニ必用ナル者ノミ之ヲ許スヘシ

第三十二條 未決者法廷ニ出ル時制服ヲ所持セル者ハ之ヲ着セシム

但帶劔ヲ許サス

第三十三條 未決者及定役ニ服セサル已決囚ハ每朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ於テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス午飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前役ヲ罷メシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニヨリ其時間ヲ伸縮スルコトヲ得

第三十四條 定役ニ服スル者ハ每朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ於テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス午飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前役ヲ罷メシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニヨリ其時間ヲ伸縮スルコトヲ得

起床還房及就役休役其他動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第三十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授クルコトヲ要ス

第三十六條 科程ヲ畢リタル者ハ時間ニ拘ハラズ役ヲ罷メシム午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヤヲ驗視シ若シ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第三十七條 工業勉勵シテ食費ヲ償フ可キ工錢ヲ得ル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ニ過クルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ニ過クルコトヲ得ス

第三十八條 在監人各自ノ工錢ヲ以テ物品ノ需用ヲ願フ時ハ一週日毎ニ買辦支給スルモノトス

第三十九條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月ニ至ルマテハ三日毎ニ一次十月ヨリ五月ニ至ルマテハ七日毎ニ一次トス

第四十條 已決囚ノ髮ハ之ヲ短雜スヘシ

第四十一條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澀ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クコトヲ要ス但病者ノ物品ト混一ニシテ之ヲ曝洗ス可カラス

第四十二條 燈火ハ監房外ニ置キ危險ノ虞ナカラシム

第四十三條 監房ニハ常ニ左ノ器具ヲ備ヘ置クヘシ

- 一貯水器 木製
- 一洗手盥 木製

- 一飲器 木製
- 一唾器 木製
- 一便器 木製
- 一蓆帶 但監房ニ廁間アルモノハ此器ヲ用ヒス
- 一雜巾

第四十四條 特赦ヲ受ケタル者アル時ハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ於テ他ノ囚徒ニ其旨ヲ告達シ仍ホ揭示スヘシ

第四十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシム可シ若シ文字ヲ知ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀テスヘシ但未決監ニハ第二款第九款ヲ揭示セス

揭示

- 一在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就ク時ハ慎テ容止ヲ正フスヘシ
- 一每朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜ス可シ
- 一每朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及席壁廁間等ヲ掃除スヘシ

一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ唾壺外ニ唾シ貯水ヲ濫用スルコトヲ禁ス  
 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ同行ノ者ト交談シ及手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルコトヲ禁ス  
 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ談話或ハ發聲或ハ濫リニ起歩スルコトヲ禁ス晝間ト雖モ放歌喧噪或ハ高聲ニ誦讀シ又ハ隣房ノ者ト談話スルコトヲ禁ス  
 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ或ハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルコトヲ禁ス  
 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ到ルコトヲ禁ス  
 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルコトヲ禁ス  
 一 總テ願向ハ官吏巡視ノ際申出ヘシ  
 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ハラズ直ニ看守所ニ通聲スヘシ  
 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非サレハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フ可キ者トス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタル時ハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ  
 一 病者ナル時ハ同房ノ者共ニ介抱ニカヲ致ス可キハ勿論其看護人ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看護スヘシ  
 一 水火風震ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署或ハ憲兵部又ハ警察署ニ其旨ヲ届出スヘシ  
 右ノ諸款ニ違フ者アルコトヲ知テ告ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分ス可キ者ナリ

年號月日

某陸軍監獄署

第四十六條 滿刑歸隊歸郷ノ者ヘハ旅次證書ヲ付與ス可シ其證書ニハ某陸軍監獄署ト記シ署印ヲ捺ス可シ

第四十七條 在監人醫官ノ診斷ヲ願フ時ハ看守長其姓名ヲ牒簿ニ記載シ醫官ニ申報スヘシ

第四十八條 醫官ハ在監人一般ノ健康ヲ保全シ毎日囚徒就役時限前病者ヲ診察シ輕役休業監房入室等ヲ區分シ看守長ニ指示ス可シ

第四十九條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物若クハ湯婆等ヲ用ユルコトヲ要スル時ハ醫官其旨ヲ證明シ監獄長之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第五十條 傳染病侵襲ノ兆アル時其消毒豫防ヲ慎重ニス可シ若シ在  
監人中傳染病者アル時ハ直ニ病性及感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫官ノ診  
斷書ヲ副ヘ所屬ノ長官ニ申報ス可シ

第五十一條 在監人死去スル時ハ監獄長醫官看守長會同驗屍ス可シ  
驗屍畢レハ其狀況及月日時限ヲ記載シ醫官ノ診斷書ヲ副ヘ本人所  
屬ノ長官ニ申報ス可シ該隊不在ノモノハ監獄署ニ於テ陸軍墓地ヘ  
埋葬シ其費用ハ本隊ヨリ償還セシム若シ軍人軍屬ニ非サル者ハ本  
籍ノ戶長(戶長ナキハ地ハ區長)及近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ  
未決者又ハ己決囚ニシテ再ヒ訊問ニ係ル者ハ軍法會議ニモ亦之ヲ  
通知スヘシ

第五十二條 看護長ハ調劑及治療器械ノ磨拭等ヲナシ又患者ノ被服  
其他需用ノ物品ハ監獄長ニ請求シテ之ヲ受授セシム  
第五十三條 看病卒ハ患者ヲ切實ニ看護シ又常ニ病室ヲ清潔ニ掃除  
スヘシ

用紙美濃紙

監獄長(檢印) 未決者名籍

主檢

何等書記氏名印

隊號兵種本管	籍地族名	籍氏名	年齡	職業及親屬	乳兒提携	入監年月日時罪	身材	容貌音聲	教育	入監中	勞動及處罰	書信ノ贈答ヲ許ス
某管下國郡區(町村)番地住族又ハ某子弟		何國郡區(町村)產	某 年 月 日 生	職業ヲ詳記スヘシ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無	男或ハ女 收監ノ時何年何ヶ月	明治何年月日午(前後)何時入監 何々ノ罪ヲ犯ス	長何尺何寸何分肥瘠強弱	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑 瘰癧子、癭瘤、黑痣、癩風、天皰、創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細 緻ニ具載ス	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳	明治何年月日何々ノ勞動アリ	明治何年月日何罰ヲ行フ	明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發來)

第六編 ○治罪 ○第四類 ○陸海軍監獄則 ○陸軍監獄署官員服務概則 五百七十九